

金沢大学資料館所蔵伝ベツレヘム出土のローマンランプにおける年代と類型の一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-04-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡部, 睦, OKABE, Mutsumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00061602

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



金沢大学資料館所蔵伝ベツレヘム出土の ローマンランプにおける年代と類型の一考察

Some Remarks on the Chronology and Typology of Roman Lamps
Reportedly Excavated in Bethlehem,
Owned by Kanazawa University Museum

金沢大学大学院 人間社会環境研究科 博士前期課程

岡部睦

MA Student, Human and Socio-Environmental Studies, Kanazawa University,
Mutsumi OKABE

Abstract

Kanazawa University Museum owns several lamps which reportedly excavated in Bethlehem. Regarding these lamps, these are introduced in Kanazawa University Museum Newsletters published in 1997. This article provides introduction such as measurement and detailed description and notes some remarks on the chronology and produced kiln in some lamps.

In the present article, I reorganize these lamps that are considered to be Roman lamps and expand the range of utilization by measuring lamps which are not recorded as measured drawing, photographing all of the investigated lamps, and creating 3D models. According to these lamps whose dates are specified only in a wide range of dates, such as “Roman era” in the 1997 museum newsletters, I discuss more detailed chronology by referring to the examples from the excavations in Palestine in recent years. In addition to trying to identify lamps typology, I clarify the characteristics of Roman lamps in this museum’s collection.

1. はじめに

金沢大学資料館ではベツレヘム出土とされるランプが所蔵されている。これらのランプは寄贈者の西村見暁氏がエルサレムにて購入したものである。しかし上記のランプについての来歴はベツレヘム出土と伝えられているのみで、出土資料としての来歴は確認できない。佐々木達夫氏は、1997年の『金沢大学資料館だより』（佐々木他 1997a・b）でこれらのランプ資料の整理と一部ランプの資料化を行い、年代や生産された窯について考察を行った。このようなランプは地中海を中心とする様々な地域で出土している他、ランプの型¹や胎土、装飾によってさまざまに分類され、編年が行われており、パレスチナにおいてもランプの分類や編年の研究が進められている。佐々木氏らによる先行研究では、金沢大学資料館所蔵のランプの資料化が進められているが、編年においてローマ時代、ビザンティン時代、イスラム時代など比較的幅広く推定されており補足する余地がある他、類例に基づく分類もさらに検討の余地がある。

本稿ではこれを受けて、特にローマ時代併行期の出土遺物について調査を行った。また、ランプの類型を詳細に検討することを目的として、実測図が作成されていないランプの資料化および、写真資料を作成するとともに、目視では確認できない図像を確認する目的のもと3Dモデルの作成を行った。これらの調査を元に、所蔵ランプの特徴を明らかにし、近年のシリア・パレスチナ出土資料の類例を参考に、より詳細な年代の特定とランプ型の分類を試みる他、本資料館所蔵のローマ時代併行期のランプの性格を明らかにすることを目的とする。

2. 対象資料

本稿で対象とする伝ベツレヘム出土ランプは金沢大学資料館所蔵の西村コレクションに属し、土器ランプ計58点、青銅ランプ計1点が登録されている。寄贈者の西村見暁氏が昭和37（1962）年にエルサレムの骨董屋で、キリスト生誕の地であるベツレヘムで出土したとされる土器、ガラス器、青銅器を一括購入し、ランプは1点約1ドルで購入したと伝えられている。これらの資料は昭和38（1963）年に金沢大学教育学部に寄贈され、平成元（1989）年金沢大学資料館設立に伴い金沢大学資料館に収蔵された²。これらのランプは、1997年発行の『金沢大学資料館だより』において佐々木氏らにより資料紹介がされており、全ての資料館所蔵ランプの実測および詳細の記述に加え、一部のランプについては、製作された窯の特定や実測図の作成がなされている。また、それぞれの所蔵ランプの製作年代について何世紀に所属するランプであるかまで特定されているランプが一部に見られる。

本稿では、『金沢大学資料館だより9』（佐々木他 1997a）でも紹介されたローマからビザンティン時代の土器ランプのうち、特にローマ時代併行期のランプを取り上げる。ローマ帝国において各地で7～15cmの小さな円形または楕円形の陶製ランプが生産され、このようなランプは注油口を持つディスク、その周辺部分の肩部、把手部分、灯芯口を持つノズルから成る（図1）。このようなランプは手捏ねやろくろ、型で製作され、パレスチナにおいては、レヴァントのヘレニズム化に伴い手捏ねの受け皿型ランプが見られ、ローマ時代までには型製ランプが大量生産された（Kennedy 1961:69）。ローマンランプの形状変化は主にノズルの形状にあり、アウグストゥス帝の治世（紀元前27年～紀元後14年）では、中央ディスクの幅が広く、浮き彫り装飾がされ、三角形または丸みを帯びたノズルとその両端の渦巻装飾が見られ、徐々にランプの肩部分の幅が広く、ディスク部分

が縮小する傾向にあると指摘されている (Sussman 1983:8)。この期間にパレスチナで発見されたランプは、初期のものは無装飾のろくろランプや、「ヘロデランプ³」も見られる他、後にユダヤ人独特の装飾等が見られる型製の「ダロムランプ⁴」がその多数を占めるようになる。ローマ時代末にはローマンランプの質は低下し、ビザンティン時代初期から、ベト・シャン (Bet Shean) やベト・ナッティフ (Bet Nattif) といったローマ東部の地方や他の地域のランプ型に置き換えられた (Sussman 1983:8-9)。

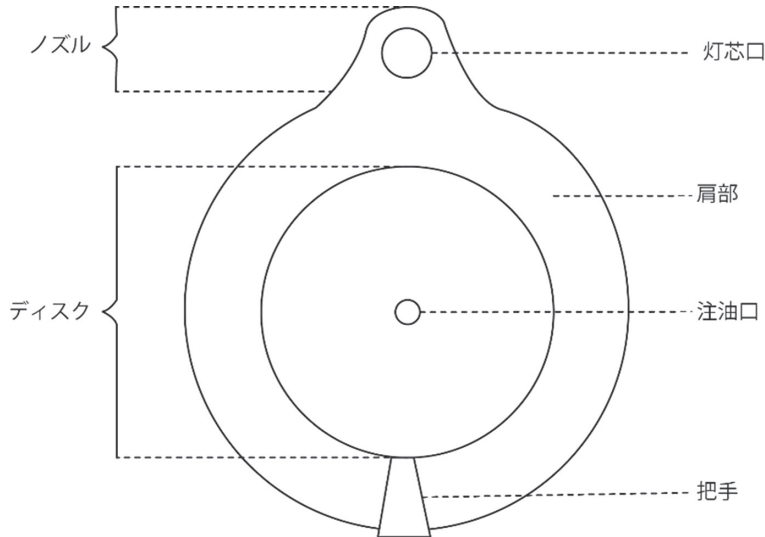


図1. 型製ランプの部位と名称

3. 研究史

ローマンランプは、器形や胎土、装飾の様子によって分類され、器形についてはS.ローシュケ (Loeschke) によるランプの肩部分の形状に基づいた分類 (Loeschke 1919) が最も使用されている他、クニドスやエフェソス出土のランプについては、それぞれ独自のノズル形状に基づいた分類が見られる (Bailey 1988:330, 369)。大英博物館のコレクションではD.M. ベイリー (Bailey) により、年代や地域ごとの特徴がまとめられているが、その大部分はディスク部分の装飾に焦点が当てられている (Bailey 1988)。

パレスチナのランプの分類は、主にCh.A. ケネディー (Kennedy) やV. サスマン (Sussman) によって行われている。ケネディーはイエール大学パレスチナ陶器ホワイティング・コレクションランプ390点を研究対象に、パレスチナにおける青銅器時代から15世紀までのランプの発展を示し、29のタイプに分類を行った (Kennedy 1961)。また他の博物館所蔵ランプでは、Y. イスラエリとU. アビダ (Israeli& Avida) により、イスラエル博物館所蔵のエレッツイスラエルとその周辺地域のランプであるカルメン&ルイワルシャウ・コレクションのうち502点を対象に、時系列に並べる試みがされている他、周辺地域から流入したランプも取り扱われている (Israeli&Avida 1988)⁵。また、オンタリオ博物館所蔵のランプは主にエジプトにおいて購入したランプと、パレスチナとエルサレムで作成されたランプを大量に購入した資料から成り立っており (Hayes 1980:2)、後者の資料については本資料館のランプの来歴と同様である点から参照に値する。

サスマンはユダヤ南部のベト・グヴリン (Bet Guvrin) から発見されたローマ時代のランプについて「ダロムランプ」と分類している (Sussman 1983) 他、イスラエル考古学庁が所有するパレスチナ出土のランプに基づいた分類も行っている (Sussman 2009)。近年では、ヨルダン川西岸地区のクムラン (Qumran) 出土のランプ197点についてJ. ムイナルチク (Młynarczyk) が分類を行い、共伴するコインによって一部のランプの年代が特定されている (Młynarczyk 2013) 他、ベト・シャンにおいてコインと共伴して出土するランプも見られ、S. ハダド (Hadad) によって具体的な年代が推定されるようになった (Hadad 1997, 2002)。また、パレスチナ出土のランプについて、ディスク部分が破壊される傾向にあり、このようなディスクの破壊行動についてはイスラエリとアビダヤ、ヒッポス遺跡 (Hippos) のランプをまとめたA. レルモリン (Iermolin) によって様々な推測がされている (Lermolin 2010)。ディスクの破壊行動については、第3章で詳述する。

4. 研究方法

ローマ時代併行期と見られるランプについて実測図の作成が行なわれていない資料 (1-96JN27、3-96JN3、4-96JN6、7-96JN12、11-96JN19、12-96JN17、14-96JN18、16-96JN20) の実測を行い、加えて写真記録と3D計測による資料化を試みる。ランプ2-96JN8については1997年の『金沢大学資料館だより9』において既に実測図が見られるが、ディスク部分の図像に検討の余地があるため、再度実測し図面を作成する。本資料館所蔵ランプの細部を観察し、パレスチナ及び周辺地域のランプを参照することで、型の特定と分類、年代における考察を行う。また、分類を行う際のランプの観点として、実測値、所蔵年代、類型、おおよその製作地、製作方法や器形といったランプの詳細、スタンプの有無、胎土の色、スリップの色、推定年代、類例、所見、保存状態の項目を設けるとともに、それぞれのランプの煤跡を確認することで、使用の有無についても観察を行う。

5. 金沢大学資料館所蔵ローマンランプカタログ

1997年発行『金沢大学資料館だより9』ではローマ時代併行期および、ローマ時代併行期からビザンティン時代とされるランプが17点見られる。本章ではこれらの資料について、実測値、所蔵年代、類型、推定製作地、器形の詳細、スタンプの有無、胎土の色、スリップの色、推定年代、類型、所見、保存状態について記す。

所蔵番号と資料番号の双方を記載し、ランプ所蔵番号1番、資料番号96JN27の資料の場合は1-96JN27と表記する。実測値はセンチメートル (cm) とする。ランプの類型、推定製作地および推定年代については、各ランプの類例を基に推測する。胎土およびスリップの色については、マンセル表色系で示す。2-96JN8、5-96JN4、6-96JN11、8-96JN5、9-96JN7、10-96JN15、13-96JN16、15-96JN14、17-96JN26の計8点の実測図については1997年発行『金沢大学資料館だより9』において、すでに実測図が作成されており、本稿では2-96JN8を除くこれらの実測図を再トレースして掲載する。加えて、『金沢大学資料館だより9』に記載されていない実測図および2-96JN8の実測を行ったものを掲載し、実測図では煤跡を灰色の塗りで示す。

1-96JN27 (図2)

【実 測 値】 本体 (縦×幅×高さ) : (8.1) × 5.8 × 3.1

注油口径:2.2

灯芯口径:灯芯口破損

底部:3.1 × 2.6

【所蔵年代】 1963年

【類 型】 ケネディータイプ2、ムイナルチクタイプ044、サスマンタイプH36、H40

【推定製作地】 エルサレム

【詳 細】 型製ランプ。筒状のノズルを有し、灯芯口付近では煤跡も確認できる。注油口の口縁部はやや突起状となっている。肩部に放射状線文を有しており、ディスク部分がない器形であり、スリップまたは付着物が確認できる。円形の安定した底部となっている。

【スタンプの有無】 なし

【胎土の色】 Hue7.5YR7/6

【スリップの色】 Hue2.5Y7/2

【推定年代】 紀元前1世紀～1世紀

【類 例】 同様の器形がイェール大学所蔵のランプNo.484 (Kennedy 1961:PL.20) に見られ、このランプはケネディータイプ2に分類される。このランプは黒色胎土で、注油口を中心とした放射状文がディスクに見られる他、片方の肩部に突起があり、円筒状のノズルを有する (Kennedy 1961: 97)。また、オンタリオ博物館所蔵、エルサレムで購入されたヘレニズムランプのパレスチナ型においても同様のケネディータイプ2が見られる (Kennedy 1980:PL.8 No.65～66)。加えて、イスラエル博物館所蔵のヘレニズムランプNo.17～18 (Israeli&Avida 1988:PL.2) にも類例が見られ、これらのランプは黒色から灰色の胎土で、年代としては恐らく紀元前1世紀に年代付けられる。同様の器形であり、かつ同様の胎土を持つ例としては、エルサレムの埋葬洞窟で出土した、サスマンタイプH36とされるNo.310 (Sussman 2009:195)、およびサスマンタイプH40のNo.325

(Sussman 2009:196) が挙げられ、これらはエルサレムの工房におけるヘレニズムの伝統を受け継いだランプとされる (Sussman 2009:59-63)。加えてクムラン出土のユダヤの放射模様ランプ、ムイナルチクタイプ044のNo.KhQ319 (Młynarczyk 2013: fig.5) も同様に類例として挙げられ、これはサスマンH40型に対応しており、紀元前1世紀後半からヘロデ治世にエルサレムの工房で生産されたとされる (Młynarczyk 2013:119)。

【所 見】 イェール大学所蔵ランプ、オンタリオ博物館所蔵ランプ、イスラエル博物館所蔵ランプに見られるヘレニズムランプの類例はいずれも胎土が黒または灰色胎土であるため、本資料は1997年『金沢大学資料館だより9』においても指摘があるように、これらのヘレニズムランプの模倣であると見られる。加えて、サスマンのH36型やH40型ランプが同様の器形かつ胎土であることを考慮すると、特にエルサレムにおけるヘレニズムランプの模倣であろう。

【保存状態】 非常にもろく、剥離箇所が多数見られる。ノズル部分が一部欠損。

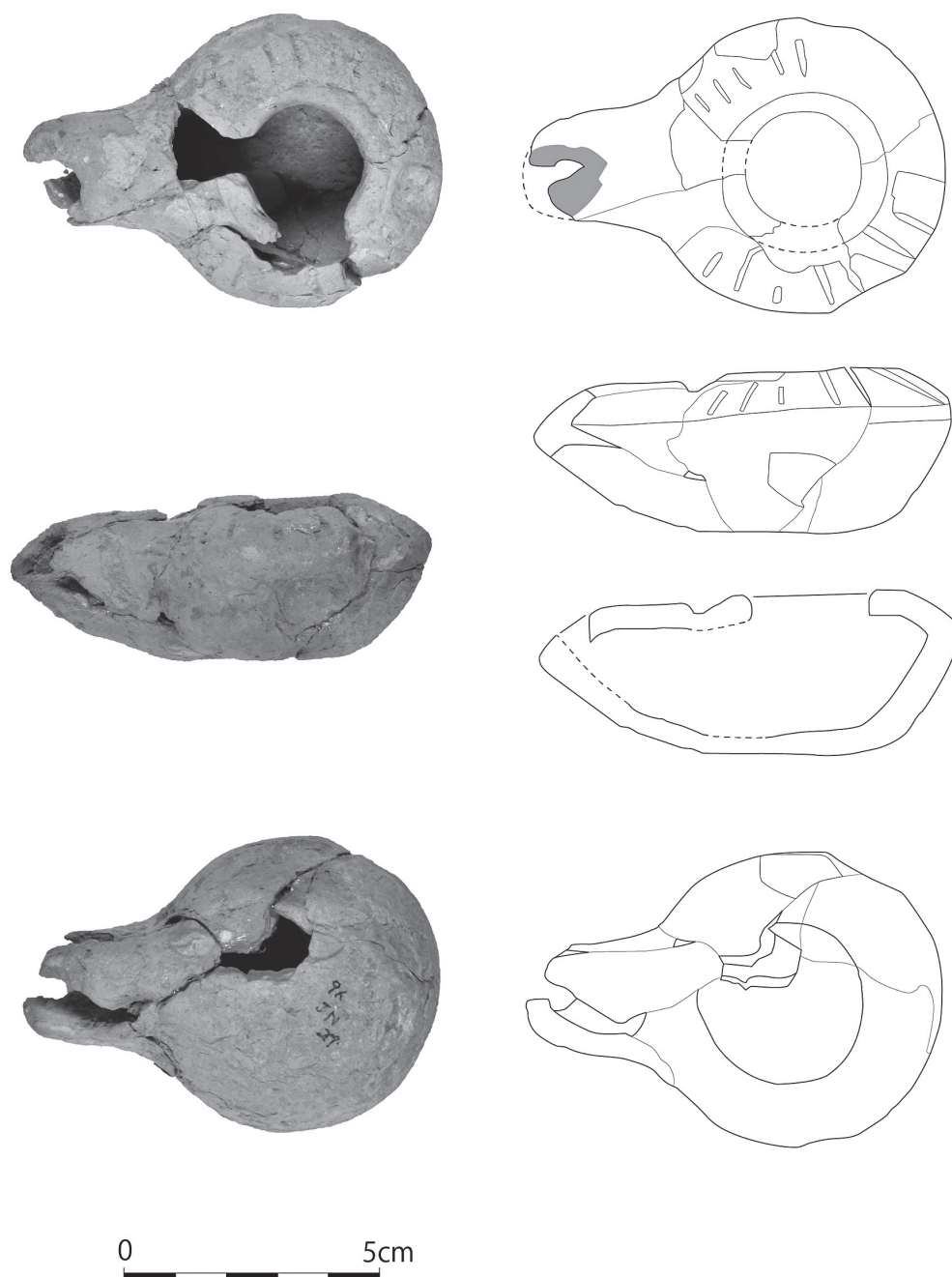


図2. 1-96JN27写真・実測図

2-96JN8 (図3)

【実 測 値】 本体 (縦×幅×高さ) : (7.6) × 7.1 × 2.8

注油口径:0.4

灯芯口径:灯芯口破損

底部径:4.3

【所蔵年代】 1963年

【類 型】 ケネディータイプ5、ローシュケタイプ8

【推定製作地】 ローマの地方生産

【詳 細】 型製ランプ。ノズルはランプ本体の一部となっており、灯芯口付近には渦巻文が確認できる他、煤跡が見られる。ディスク部分はゆるやかな凹状で、中央から外れた位置に注油口があり、図像と考えられる凹凸が見られる。底部には中央部の点と2重圈線を有する。

【スタンプの有無】 なし

【胎土の色】 Hue2.5Y7/2

【スリップの色】 Hue2.5Y8/2

【推定年代】 1世紀後半～3世紀

【類 例】 ケネディータイプ5にあたるイエール大学所蔵ランプNo.503 (Kennedy 1961:PL.21)、No.504、No.509 (Kennedy 1961:PL.22) は器形や大きさなど概ね類似しており、このランプは2～3世紀と年代付けられている (Kennedy 1961:73-75)。イエール大学所蔵ランプNo.503に加え、イスラエル博物館所蔵で紀元前1世紀～紀元後3世紀とされる地方生産ローマンランプのNo.21 (Israeli&Avida 1988:PL.3) は器形、底部、ディスク装飾において、特に2-96JN8に類似する例として挙げられる。このようなランプは1世紀後半から見られ、主に地中海諸国で一般的な型であったようである (Israeli&Avida 1988:24)。加えて、大英博物館所蔵の1世紀後半～2世紀初頭とされるヨルダン・パレスチナ・シリアランプでローシュケタイプ8型とされるQ2299 (Baily 1988:PL.58 fig.91) にも類似点が見られる。

【所 見】 ディスクの図像が損耗しており、繰り返しコピーされた型から作成された可能性が高い。小さな注油口はローマ時代の特徴となっており、ディスクが割られていない点も注目すべき点である。また、ディスク部分の図像とみられる凹凸については次章で詳述するが、釣りの人図像であると見られる。

【保存状態】 ノズル部分が一部欠損。ディスク表面が磨耗しているように見られる。

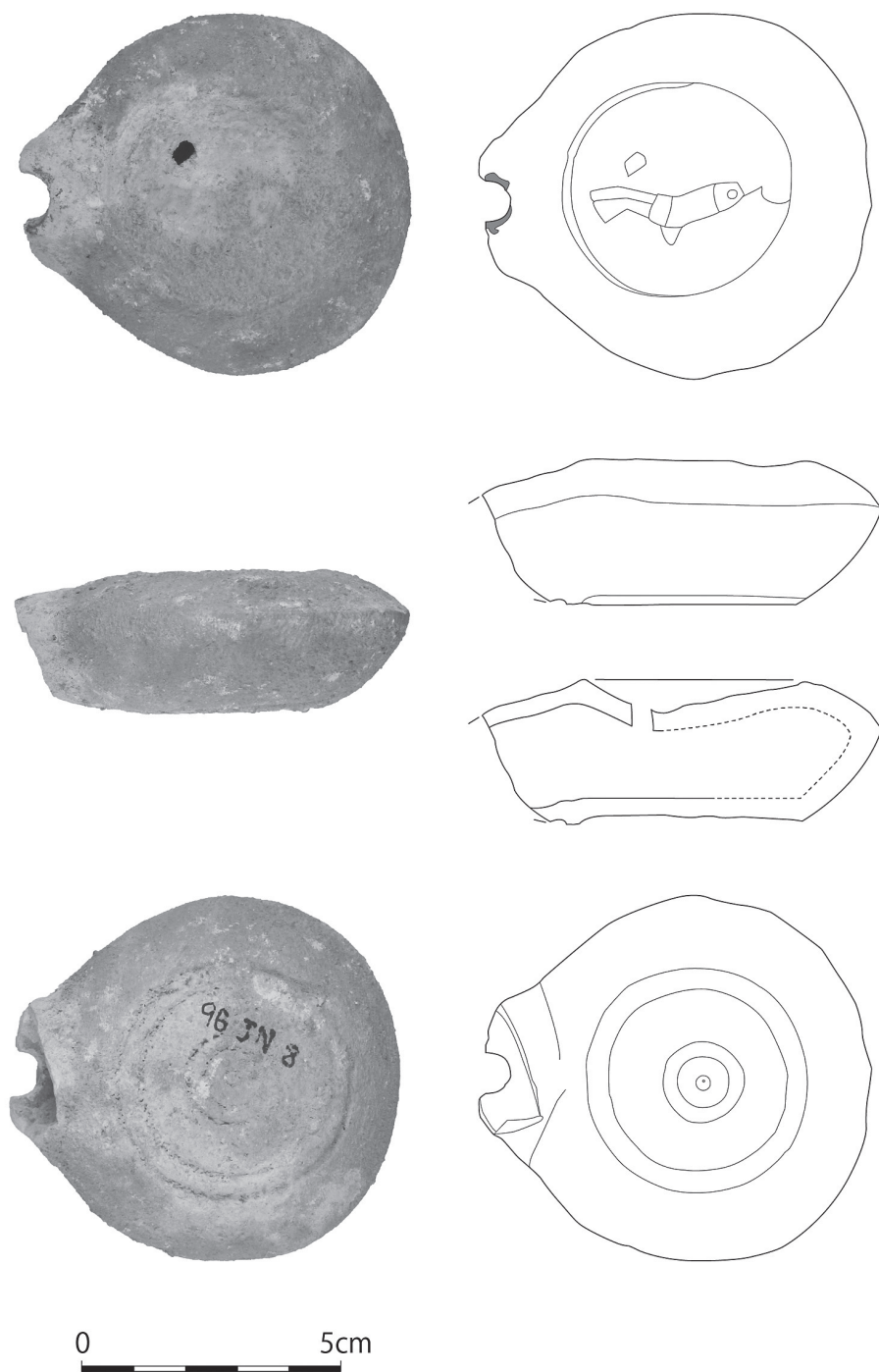


図3. 2-96JN8写真・実測図

3-96JN3 (図4)

【実 測 値】 本体 (縦×幅×高さ) : (7.3) × 6.6 × 2.7

注油口径:0.7

灯芯口径:灯芯口破損

底部:丸底

【所蔵年代】 1963年

【類 型】 ケネディータイプ5、ローシュケタイプ8

【推定製作地】 ローマの地方生産、特にトルコ・シリア

【詳 細】 型製ランプ。ノズルは本体の一部となっており、灯芯口に煤跡は確認できない。ディスクはゆるやかな凹状で、中央に小さな注油口があり、図像や破損は確認できない。肩部においても図像や文様は見られない。底部は円形で安定しており、1本の刻線が見られる一方で、円などの文様は見られない。

【スタンプの有無】 なし

【胎土の色】 Hue10YR7/3

【スリップの色】 Hue10YR8/2

【推定年代】 2～3世紀

【類 例】 イェール大学所蔵、2～3世紀のケネディータイプ5に分類されるNo.499～503 (Kennedy 1961:PL.21)、No.504～509 (Kennedy 1961:PL.21) のランプに器形が類似する (Kennedy 1961:73-75)。加えて、イスラエル博物館所蔵のローマンランプ、No.40～44 (Israeli&Avida 1988:24) に器形が類似する他、オンタリオ博物館所蔵のシリアランプNo.366 (Hayes 1980:PL.42) でありケネディータイプ5の約2世紀のランプ (Hayes 1980: 91) にも器形が類似している。ただし、これらのランプのディスク部分に図像が見られる点は、3-96JN3と異なる。大英博物館の資料からは2種類のランプが類例としてあげられる。1点目であるタルサスランプQ2631～2633 (Baily 1988:PL.72) のローシュケタイプ8、淡黄褐色胎土、約100年～225年に年代付けられるランプ (Baily 1988:322) はハート型のノズルを有している点で、やや異なる。2点目の類例として、クニドスランプQ2880 (Baily 1988:PL.91) のローシュケタイプ8、オレンジ胎土とスリップで2世紀に年代付けられるランプ (Baily 1988: 354) が挙げられ、このランプが最も類似しているように見られる。

【所 見】 ケネディータイプ5や、イスラエルとアビダのローマンランプの地方生産ランプ、ヘイスのシリアランプと比較すると、本資料 (3-96JN3) は、比較的ディスク部分が広く、かつ明らかにディスク部分に図像が見られず、やや異なる類型である可能性が高い。ディスクが破壊された形跡がない点に留意する必要がある。

【保存状態】 ノズル部分が一部欠損。

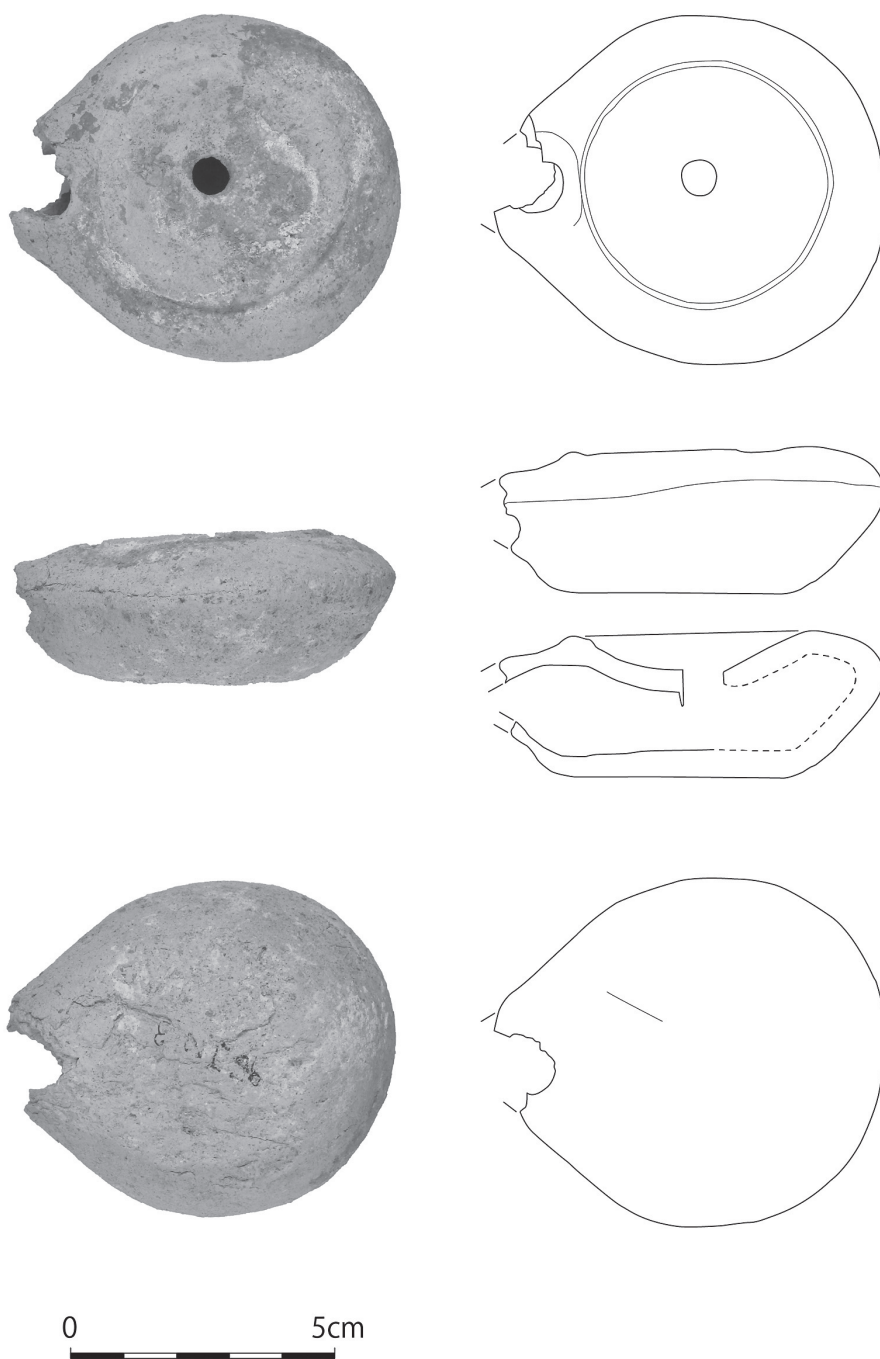


図4. 3-96JN3写真・実測図

4-96JN6 (図5)

【実 測 値】 本体(縦×幅×高さ):10.1×7.7×2.5

注油口径:0.7

灯芯口径:1.3×1.1

底部:損傷しているが約4.1

【所蔵年代】 1963年

【類 型】 ケネディータイプ5

【推定製作地】 ローマの地方生産、特にジェラシュ (Jerash) またはキプロス

【詳 細】 型製ランプ。やや突き出た小さなノズルを有する。灯芯口に煤跡がみられる。ディスクは肩部からやや低い位置で平坦な形状となっており、図像は見られない。また、ディスク中央に小さな注油口を持つ。肩部には図像または文様はうかがえないが、削られたような痕跡が見られる。ノズルと反対側の肩部には、かつて把手があったようである。

【スタンプの有無】 なし

【胎土の色】 Hue2.5Y8/2

【スリップの色】 Hue2.5Y8/1

【推定年代】 2～3世紀後半

【類 例】 器形はイェール大学所蔵のケネディータイプ5、No.499～503 (Kennedy 1962:PL.21)、No.504～509 (Kennedy 1962:PL.22) に類似し、これらのランプは2～3世紀と年代づけられる (Kennedy 1961: 73-75)。また、ケネディータイプ5はしばしば把手を有しておらず、ここではループ状の把手を持つNo.501のみ確認できる。同様に器形の類例として、イスラエル博物館所蔵の紀元前1世紀～紀元後3世紀のローマンランプNo.38 (Israeli&Avida 1988:PL.6) が挙げられる。このランプは、トランスヨルダンのジェラシュにおいて発見されたランプに類似し、地方の工房で生産されたランプのようである (Israeli&Avida 1988: 30-31)。加えてオンタリオ博物館所蔵のキプロスランプのうち、円形ノズルランプとされるNo.333 (Hayes 1980:PL.40) にも類似する。このランプは3世紀後半に年代付けられる (Hayes 1980:81-82)。

【所 見】 ディスク部分の破損は確認できないが、ランプ肩部分に削られた痕跡がある他、ディスクにのみ白いスリップが見られる。類例として挙げられているキプロスランプは、初期には少々灰を含む胎土で、1世紀頃には黄色からオレンジ色の胎土が使用され、3～4世紀になると焦げた茶色の胎土が使用される傾向となり、紀元後300年頃までには型を粗くした器形が発生するようになる (Hayes 1980:75-76)。本資料はこの型を粗くした器形に類似している。

【保存状態】 把手部分が欠損。肩部からディスクにかけてひび割れが見られる。

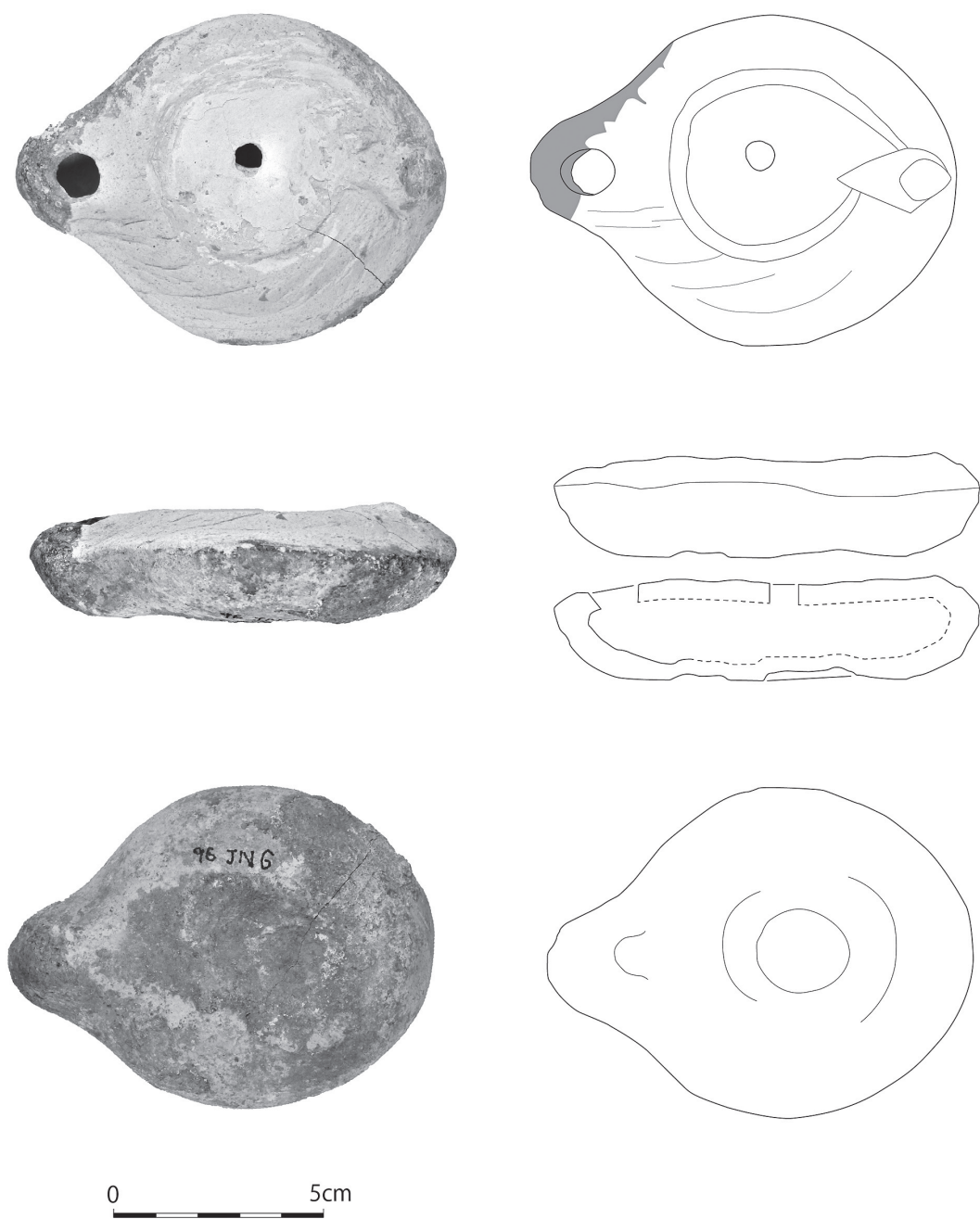


図5. 4-96JN6写真・実測図

5-96JN4 (図6)

【実 測 値】 本体(縦×幅×高さ):7.7×7.4×3.0

注油口径:ディスク破損

灯芯口径:0.9

底部径:3.6

【所蔵年代】 1963年

【類 型】 アダドタイプ7変異型1-A

【推定製作地】 ローマ輸入ランプ

【詳 細】 型製ランプ。灯芯口に煤跡がみられる。ノズルは小さく、ノズル付近に渦巻模様装飾がある。両肩部に耳状の把手を有し、肩部の装飾肩部の把手部分近くに単体の円の装飾が見られるのみである。凹状のディスクは破損している。また、肩部とディスクの境界線には3重の円によって区切られている。二重の円で囲まれた平坦で安定した底部となっている。

【スタンプの有無】 なし

【胎土の色】 Hue2.5Y6/2

【スリップの色】 Hue2.5Y8/2

【推定年代】 1世紀後半～2世紀

【類 例】 両耳の把手部分については、イスラエリとアビダのヘレニズムランプNo.17 (Israeli&Avida 1988:PL.2) に類例が見られる一方で、器形は類似していない。器形については、ローマンランプのNo.45～47 (Israeli&Avida 1988:PL.8) が、ディスクが破壊されている点で類例として挙げられる。より器形が類似する例としては、ヒッポス出土のアダドタイプ7変異型1-AのランプNo.1～2 (Lermolin 2010:PL.1)、ランプNo.12 (Lermolin 2010:PL.3) も類例として挙げられる。このタイプは滑らかな灰色または茶系統の胎土で作成された輸入ランプで、1世紀後半から2世紀とされる (Hadad 2002:19-20)。これらの出土ランプは破損が激しいものの、両肩部に把手を有しているようにも見られる。

【所 見】 ディスク部分のみが意図的に破壊されている点に留意する必要がある。

【保存状態】 ディスク部分破損。摩耗が激しい。

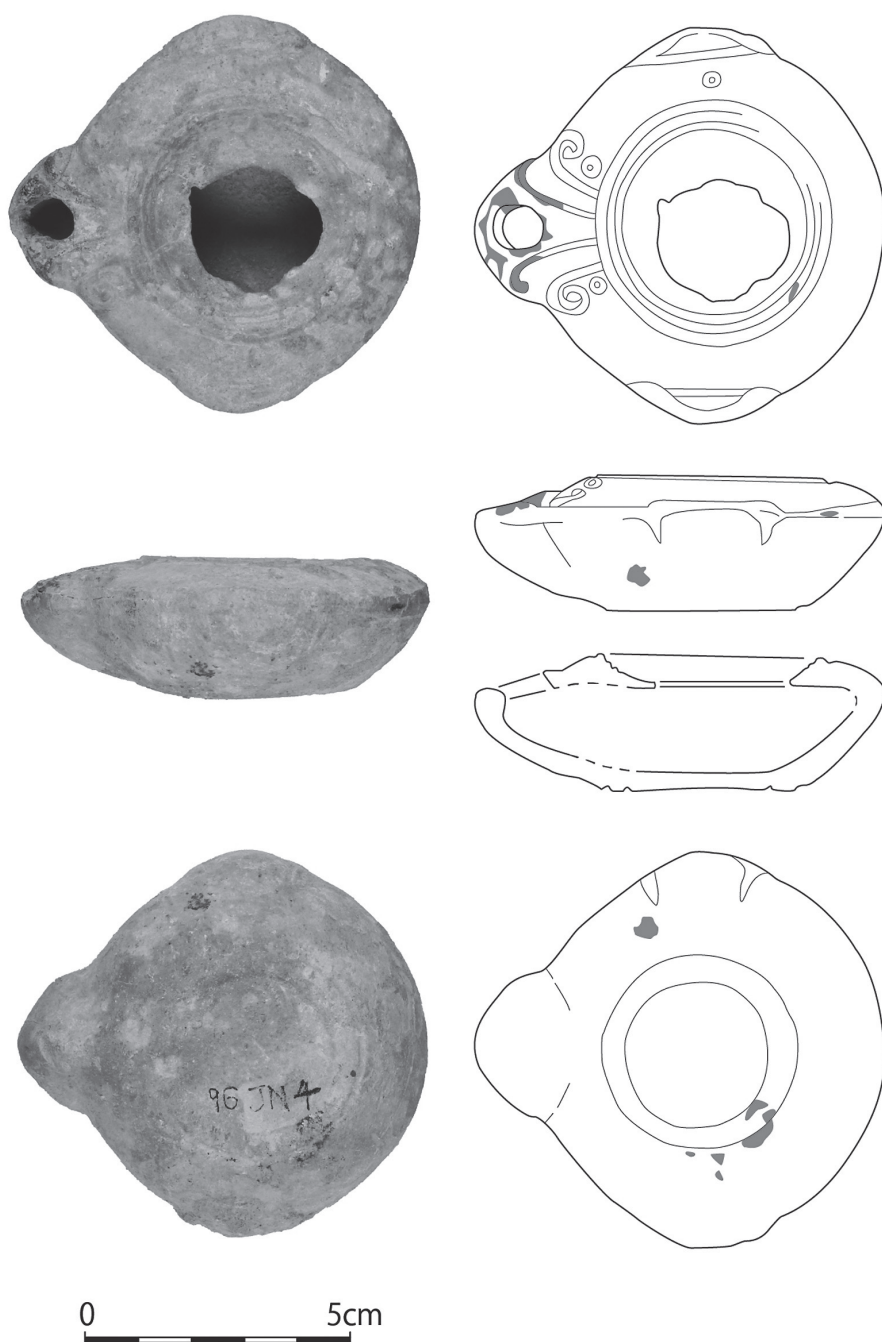


図6. 5-96JN4写真・実測図（1997年『資料館だより9』を再トレース）

6-96JN11 (図7)

【実 測 値】 本体(縦×幅×高さ):7.6×6.4×2.6

注油口径:ディスク破損

灯芯口径:1.4

底部径:3.3

【所蔵年代】 1963年

【類 型】 アダドタイプ15

【推定製作地】 エルサレム

【詳 細】 型製のランプ。ノズルはやや突き出しており、小さな形状となっている。また、ノズルと本体は線によって区切られており、ノズル付近には渦巻模様およびパンテオンのような図像が見られる。灯芯口には煤跡がある。肩部には放射線状の曲線模様がみられ、肩部とディスクの境界線は2本の刻円で区切られている。ディスク部分は凹状で、破損している。底部は2重の同心円状の円で平坦な安定した構造となっている他、中央部分には小円と2本の刻線が見られる。加えて、ノズルと対応する部分には2直線の刻文が見られる。

【スタンプの有無】 底部に2本の刻線とその間に1点の刻円が見られる。

【胎土の色】 Hue7.5YR7/6

【スリップの色】 Hue7.5YR8/1

【推定年代】 4～5世紀

【類 例】 ベト・シャン出土の「Karm al-Shaikh ランプ」として知られるアダドタイプ15に分類されるランプNo.49が類例として挙げられる(Hadad 2002:25)。これらのランプはエルサレム周辺で流行した型であり、ベト・シャンではこれらの型のランプは円形劇場(4世紀後半建設)と隣接する通り(522年建設)の間の層において4～5世紀の硬貨と共伴して発見されている(Hadad 2002:24)。

【所 見】 ディスクが意図的に破壊されている点に留意する必要がある。

【保存状態】 ディスク破損。

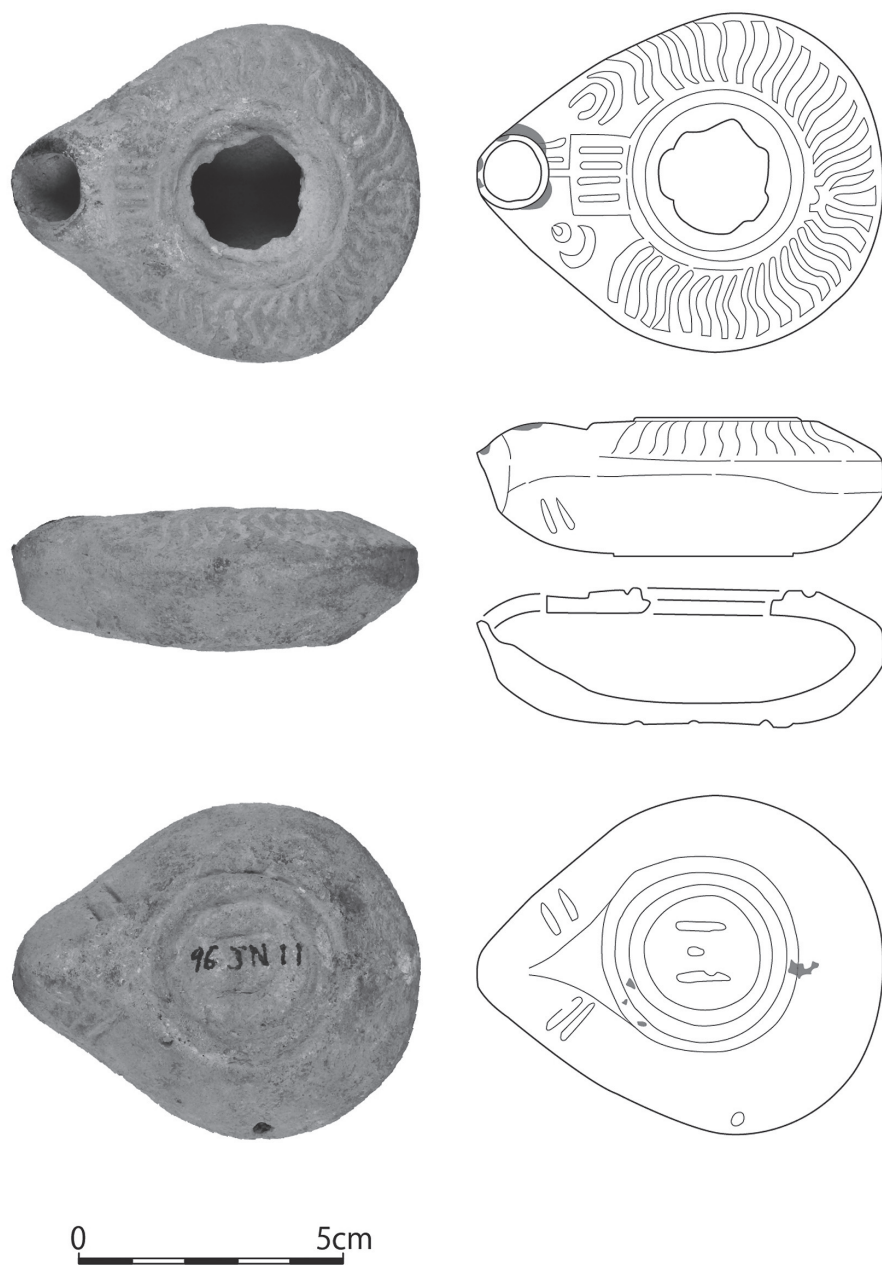


図7. 6-96JN11写真・実測図（1997年『資料館だより9』を再トレース）

7-96JN12 (図8)

【実 測 値】 本体 (縦×幅×高さ) :7.9×6.6×2.8

注油口径:ディスク破損 (1.4)

灯芯口径:2.2×1.8

底部径:3.4

【所蔵年代】 1963年

【類 型】 アダドタイプ15

【推定製作地】 エルサレム

【詳 細】 型製ランプ。小さなノズルを有し、灯芯口付近には煤跡が見られる。肩部は放射状模様で装飾がされており、ディスク部分は凹状で、破損している。底部は円形で、ノズルの形状に沿った高台が見られる。ランプ内部から油臭あり。

【スタンプの有無】 なし

【胎土の色】 Hue2.5YR6/3

【スリップの色】 Hue5Y7/1

【推定年代】 4～5世紀

【類 例】 6-96JN11と同様に、ベト・シャン出土の「Karm al-Shaikhランプ」として知られるアダドタイプ15に分類されるランプNo.49が類例として挙げられる (Hadad 2002:25)。

【所 見】 ディスクが意図的に破壊されている点に留意する必要がある。灯芯口付近に煤跡が見られる他、ランプ内部から油臭がすることから、実際に使用されていたランプであると考えられる。

【保存状態】 全体的に摩耗。ディスク破損。

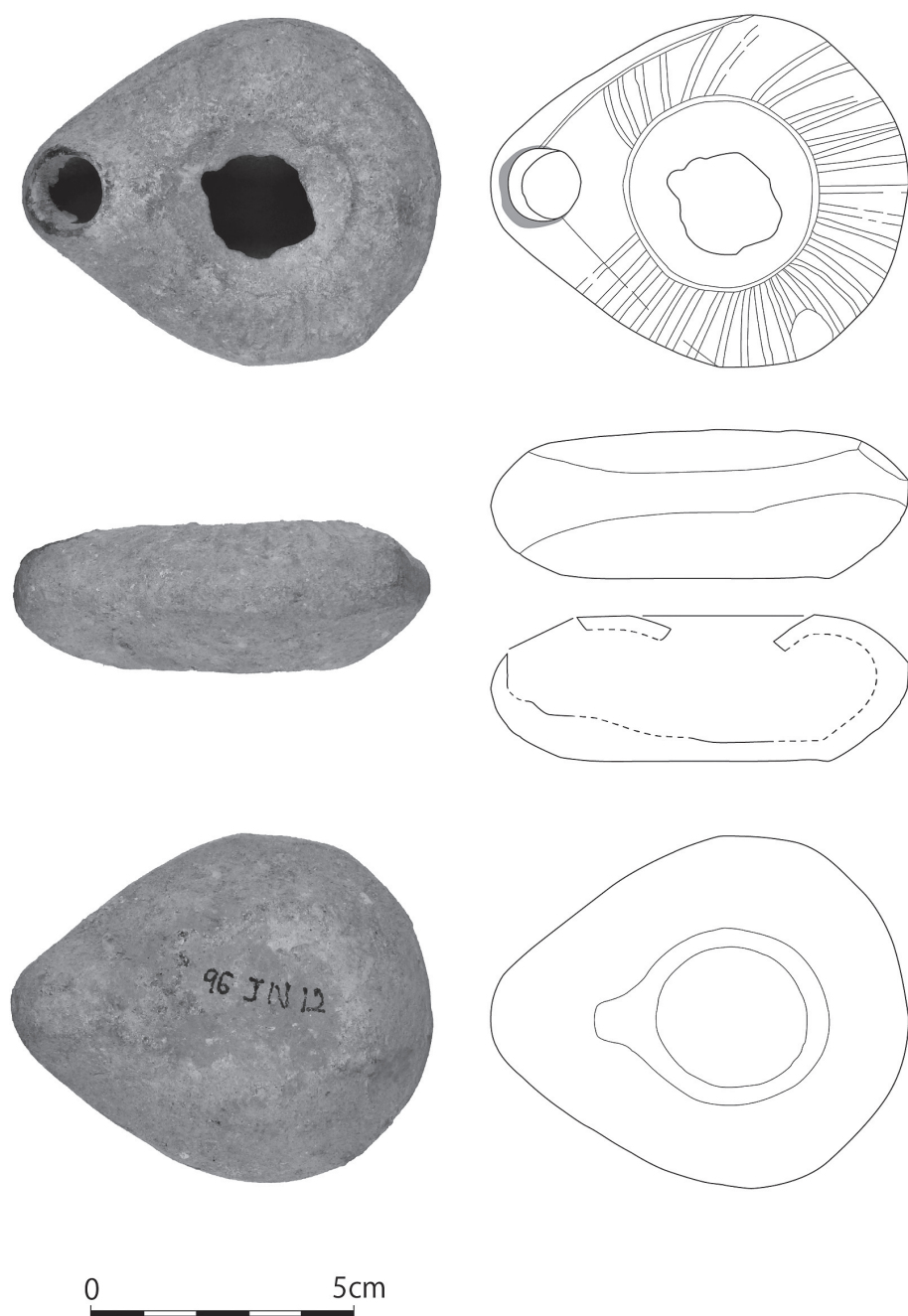


図8. 7-96JN12写真・実測図

8-96JN5 (図9)

【実 測 値】 本体(縦×幅×高さ):7.9×6.8×2.9

注油口径:ディスク破損

灯芯口径:0.9×1.4

底部径:3.4

【所蔵年代】 1963年

【類 型】 アダドサブタイプ7変異型1-B

【推定製作地】 ローマの地方生産

【詳 細】 型製ランプ。小さなノズルを有する。注油口は上面を割って作成されており、煤跡が見られる。肩部に文様は確認できず、肩部からディスク部分にかけて凸状となっているが、線等での境界線は確認できない。また、ディスク部分は破損している。ノズルと反対方向の肩部に把手を有しており、耳状突出小把手の形状となっている。

【スタンプの有無】 なし

【胎土の色】 Hue7.5YR7/3

【スリップの色】 Hue7.5YR8/3

【推定年代】 2世紀後半～3世紀

【類 例】 耳状突出小把手の類例はヒッポス出土のアダドサブタイプ7変異型1-BランプNo.45～48 (Lermolin 2010:PL.9) に確認できる。これらのランプが出土したヒッポス遺跡の複合浴場遺構におけるローカスL1973のピットにおいて、3世紀中盤の様々な国産土器が発見されている他、共伴遺物として3～4世紀の陶器が挙げられる (Kapitaikin 2010:100-101) ことから、これらの型は3世紀に年代付けられる (Lermolin 2010:122)。また、アダドサブタイプ7変異型1-Bはローマの地方生産ランプで、2世紀後半から3世紀と年代づけられている (Hadad 2002:19-20)。

【所 見】 ディスクが意図的に破壊されている点に留意する必要がある。

【保存状態】 ディスク破損。

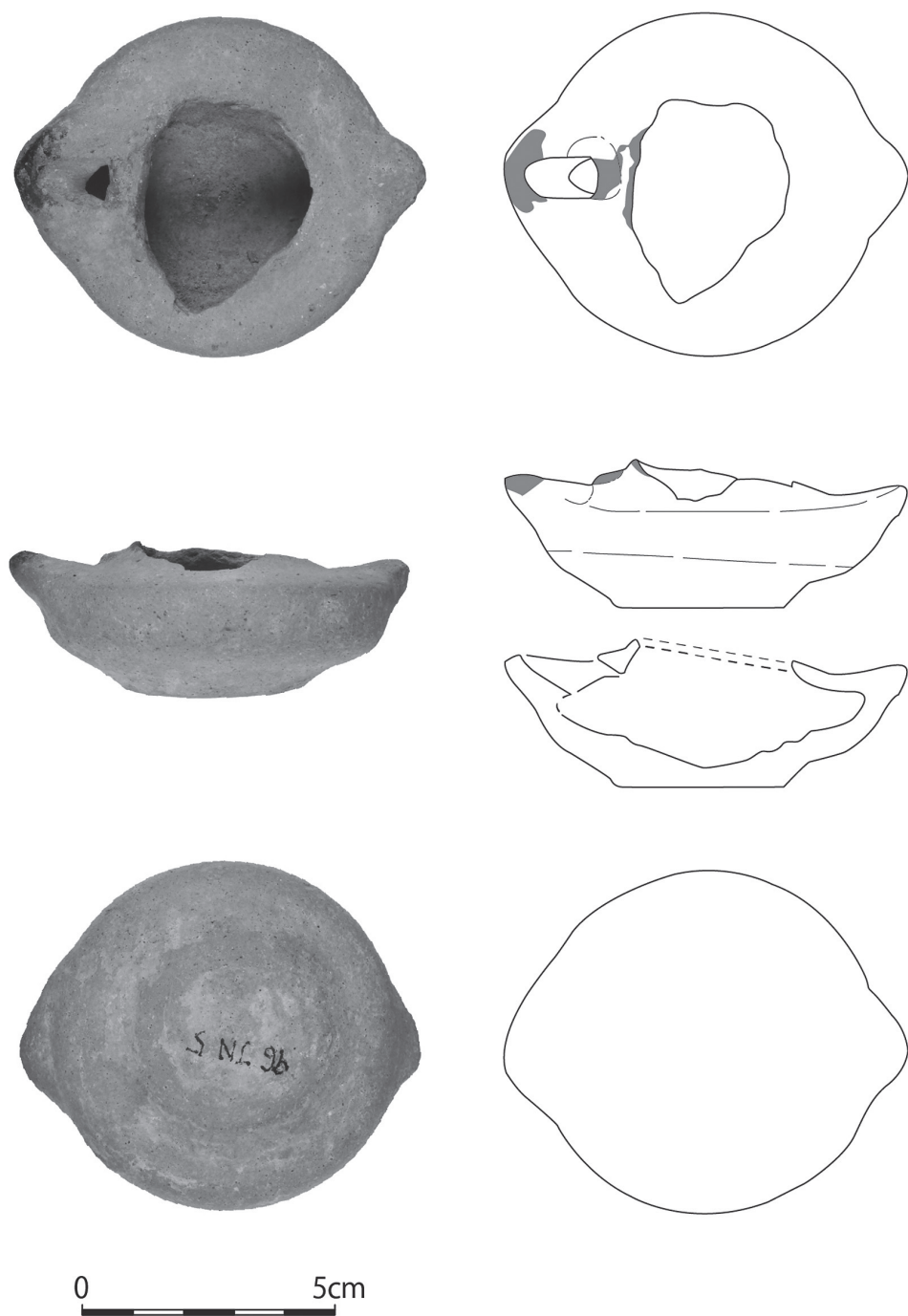


図9. 8-96JN5写真・実測図（1997年『資料館だより9』を再トレース）

9-96JN7 (図10)

【実 測 値】 本体(縦×幅×高さ):7.9×6.5×3.3

注油口径:2.0

灯芯口径:1.2

平底径:4.1

【所蔵年代】 1963年

【類 型】 アダドタイプ13グループ2

【推定製作地】 パレスチナまたはヨルダン

【詳 細】 型製ランプ。ノズルは小さく、灯芯口には煤跡が見られる。肩部には連続二重円文が見られ、ディスクは凸状となっている。またディスク部分に装飾は見られず、注油口は比較的広い。底部は円形であり平坦で安定した形状であり、また中央部分には単円が見られる。ノズルと反対側の肩部に把手を有する。

【スタンプの有無】 なし

【胎土の色】 Hue2.5Y6/1

【スリップの色】 Hue2.5YR5/8

【推定年代】 3～4世紀

【類 例】 イスラエル博物館所蔵、ジェラシュの工房ランプNo.270～272 (Israeli&Avida 1988:PL.XL7) に類似する。これらのランプは1～2世紀と年代付けられる (Israeli&Avida 1988: 94)。また、ベト・シャン出土のランプでアダドタイプ13のグループ2に分類されるランプ (Hadad 1997: 184, 2002:21) に類例が見られ、「Jebel Jofeh」型と呼ばれるランプとして知られる (Hadad 2002:22)。このタイプは3～4世紀とされるジェラシュで広く見られるランプの型で、3～4世紀とされるランプの例が数例ヨルダンのペラ (Pella) においても見られる。しかし、ベト・シャンにおける同様の特徴を持つランプは、後期ローマ土器と2点のコインと共伴して出土しており、このコインがトレボニアヌス・ガッルス治世 (251～253年) とコンスタンティヌス1世治世 (307～337年) のものであることから、ベト・シャン出土のランプは250～350年と年代付けられている (Hadad 1997:151-152)。

【所 見】 イスラエル博物館所蔵のランプの類例は肩部装飾がされていないか、放射状文であるものが多く、文様の点からみると円の連続文が見られるベト・シャン出土のランプが類例としてより適切である。

【保存状態】 全体的に磨耗しているが、大きな破損は見られない。

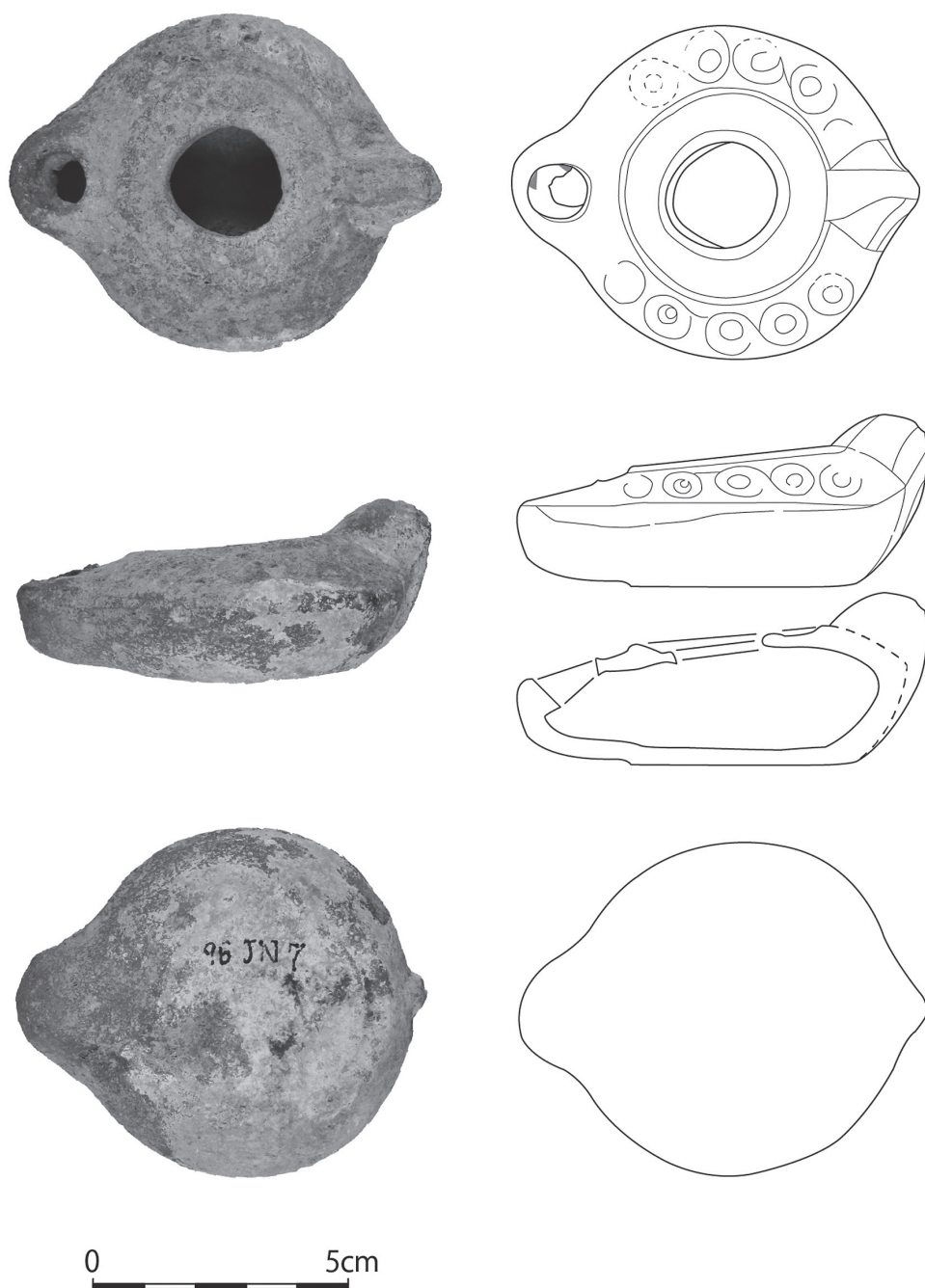


図10. 9-96JN7写真・実測図（1997年『資料館だより9』を再トレース）

10-96JN15 (図11)

【実 測 値】 本体(縦×幅×高さ):9.0×6.9×3.5

注油口径:2.1

灯芯口径:1.3

平底径:4.6

【所蔵年代】 1963年

【類 型】 ディスク図像はサスマンタイプH41A

【推定製作地】 エルサレム

【詳 細】 型製ランプ。ノズルは比較的大きく、四角形となっており、ノズルと本体が線で区切られる。灯芯口には煤跡は見られない。ディスク部分は無く、肩部に注油口が設けられる形状となっている。肩部には注油口を中心とした花文状の連続円弧文の装飾が見られ、ロゼット文様のようなものである。ノズルと反対側の肩部にノブ状の把手を有する。底部は丸底となっている。

【スタンプの有無】 なし

【胎土の色】 Hue10YR8/2

【スリップの色】 Hue5Y8/1

【推定年代】 3～7世紀

【類 例】 装飾と器形が類似する例として、イスラエル博物館所蔵の3～7世紀とされる地方工房製ランプNo.289 (Israeli&Avida 1988: PL.L1) が挙げられる。このランプはエルサレムとその周辺に特徴的なランプとなっている (Israeli&Avida 1988:104)。一方でこれらのランプのノズルは四角形ではなく、ノズルの形状で同様の装飾を持つランプはメロン (Meron) 出土、サスマンタイプH41Bのランプに類似する。これらのランプは紀元前1世紀から1世紀と年代づけられる (Sussman 2009:156,198 No.345)。このランプはノズルの形状とランプ装飾、胎土の色に類似点が見られるが、把手を有していない。

【所 見】 煤跡など使用痕が見られず、未使用であるか、または実際に使用されないような用途であった可能性が示唆できる。サスマンタイプH41Aはエルサレムの工房製ランプであり、ヘレニズムランプの影響を受けたランプとなっている (Sussman 2009:64)。しかしこのタイプには把手が取り付けられていない。よって本資料 (10-96JN15) は、このサスマンタイプH41Aからの影響を受けた後世のランプであると考えられる。

【保存状態】 やや磨耗しているが、大きな損傷は見られない。

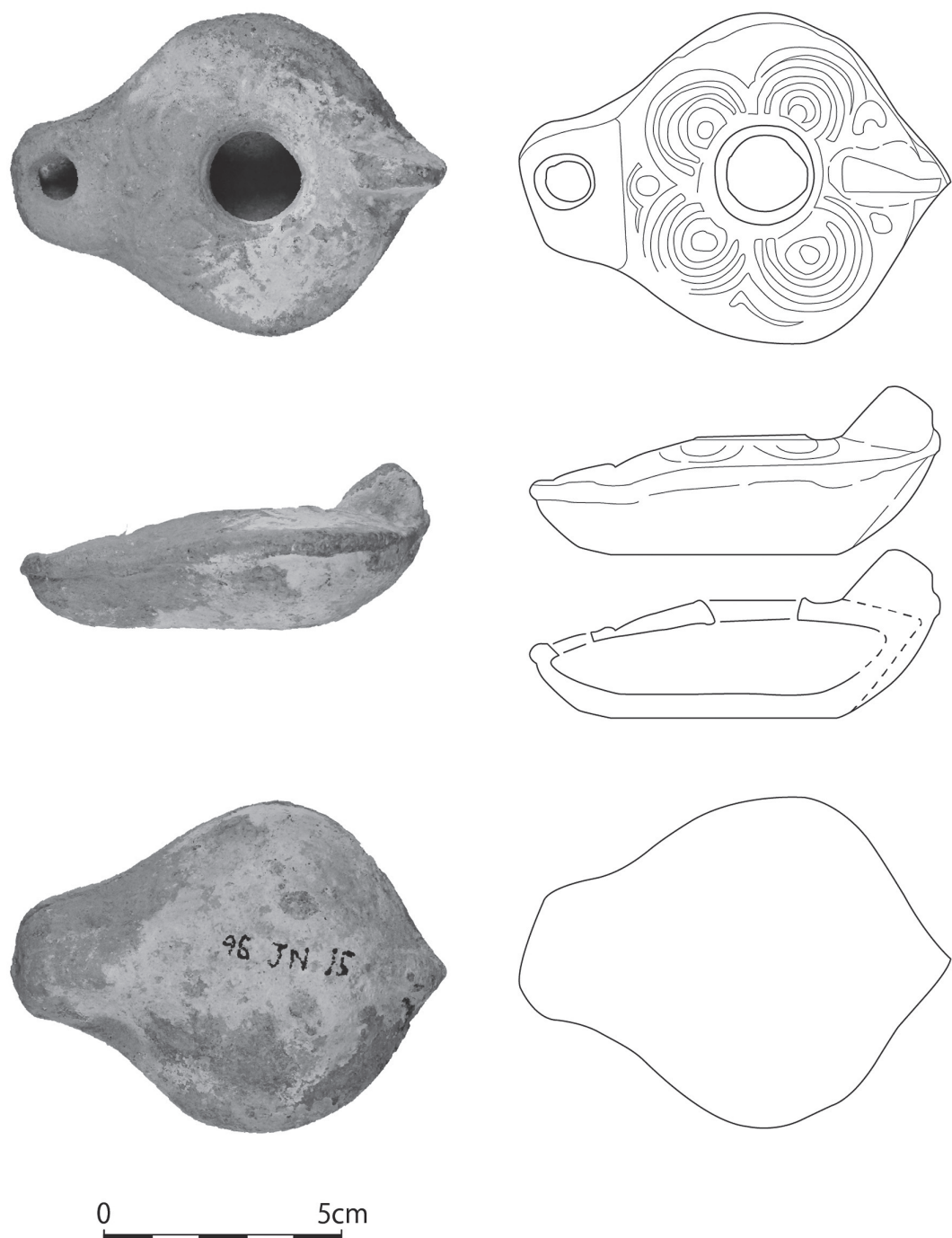


図11. 10-96JN15写真・実測図（1997年『資料館だより9』を再トレース）

11-96JN19 (図12)

【実 測 値】 本体 (縦×幅×高さ) : (8.2) × 6.7 × 2.7

注油口径:1.0

灯芯口径:1.9

底部径:丸底

【所蔵年代】 1963年

【類 型】 なし

【推定製作地】 エルサレム周辺

【詳 細】 型製ランプ。ノズルは小さくやや本体から突き出た形状となっている。灯芯口には煤跡が確認でき、ノズル全体に広がっている様子がうかがえる。ディスク部分はなく、肩部に注油口が設けられる形状となっている。底部には高台はないが、円形でノズル部分の一部をカバーする安定した底部を形成している。

【スタンプの有無】 なし

【胎土の色】 Hue7.5YR7/4

【スリップの色】 Hue10YR8/2

【推定年代】 3～7世紀

【類 例】 器形はイスラエル博物館所蔵の3～7世紀における地方工房製ランプNo.292 (Israeli&Avida 1988: PL.L1) に類似し、このランプはエルサレムとその周辺に特徴的なランプとなっている (Israeli&Avida 1988:104)。

【所 見】 本資料 (11-96JN19) の肩部が破損しているため、把手の有無については検討できない。類例として挙げたイスラエル博物館所蔵ランプNo.292には肩部に装飾がある一方で、本資料には肩部装飾が確認出来ない点に留意する必要がある。

【保存状態】 非常にもろく、大きく4点の破片に分離している。別個体の破片1点を含む。

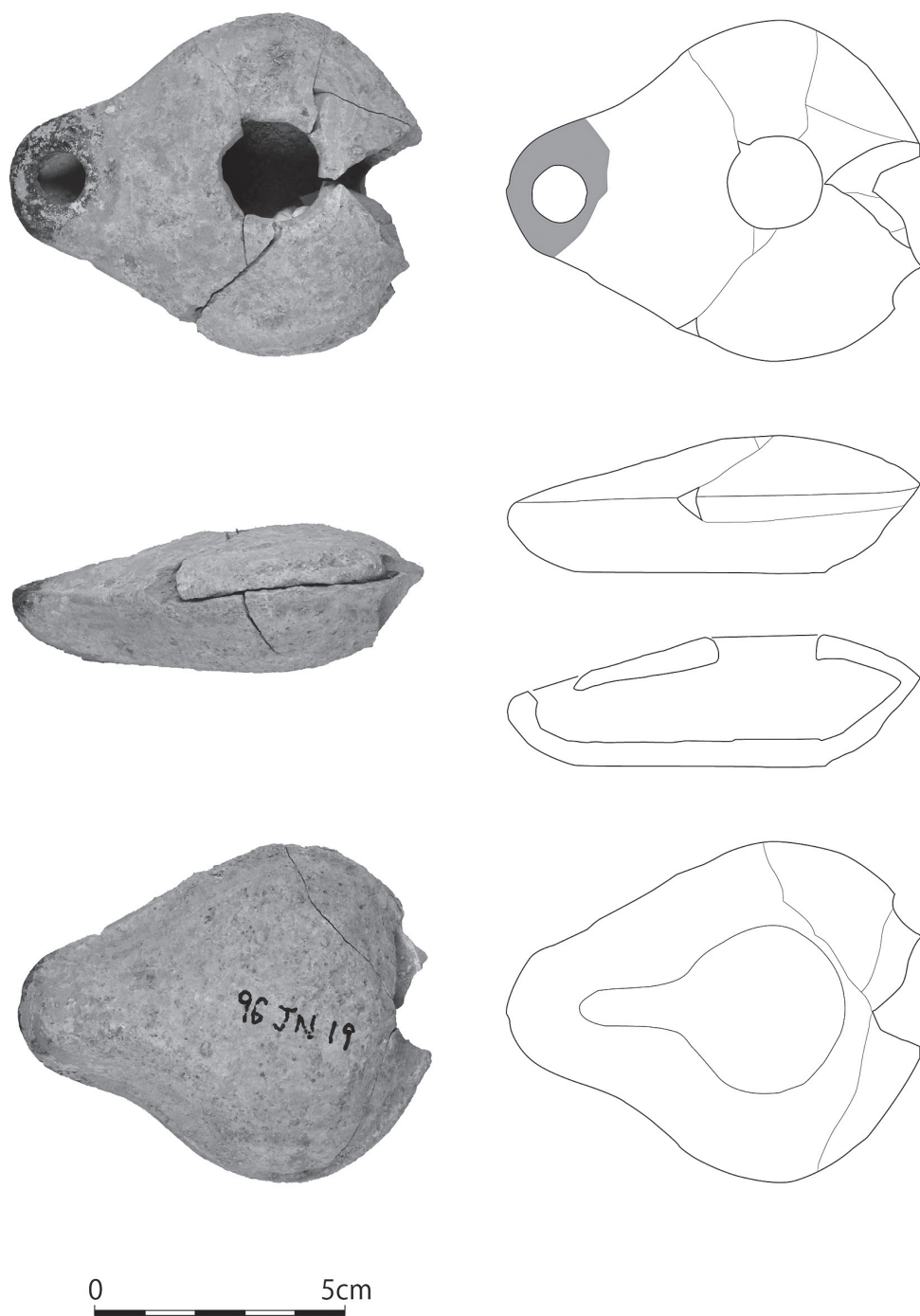


図12. 11-96JN19写真・実測図

12-96JN17 (図13)

【実 測 値】 本体 (縦×幅×高さ) :8.6×6.5×3.4

注油口径:1.9

灯芯口径:1.2

底部径:3.2×3.0

【所蔵年代】 1963年

【類 型】 アダドタイプ13グループ1

【推定製作地】 エルサレム周辺

【詳 細】 型製ランプ。ノズルは本体からやや突き出た形状となっており、ノズル周辺には渦巻文またはノズルと本体を区切る円弧が見られる。灯芯口には煤跡が確認できる。ディスク部分は無く、肩部に注油口が設けられる形状となっている。注油口を中心に花文状の連続円弧文の装飾が見られ、ロゼッタ文様のようなものである。ロゼッタ文様は注油口を中心とする円で囲まれ、この円の外部、すなわち肩部の注油口から最も遠い部分には放射状線文を有している。ノズルの反対側の肩部にはノブ状の把手が見られる。底部には円形の高台があり、円形高台から把手を有する方面に向かって高台が伸びている形状となっている。しかし、底部の形状はほぼ丸底であり、高台としての機能は見られない。

【スタンプの有無】 なし

【胎土の色】 Hue7.5YR7/3

【スリップの色】 Hue10YR8/2

【推定年代】 3～4世紀

【類 例】 イスラエル博物館所蔵の3～7世紀における地方工房製ランプNo.289 (Israeli&Avida 1988:PL.L1) に類似し、このランプはエルサレムとその周辺に特徴的なランプとなっている (Israeli&Avida 1988:104)。また、アダドタイプ13グループ1のランプであるベト・シャン出土No.38 (Hadad 2002:22) も類例として挙げられる。これらは3世紀中盤から4世紀中盤と年代づけられる (Hadad 2002:22-24)。

【所 見】 類例に挙げたイスラエル博物館所蔵のランプは、把手部分が本資料 (12-96JN17) よりも比較的小さく、この点で本資料は後者の類例により類似している。

【保存状態】 肩部が激しく磨耗し、加えて割れ、欠けあり。

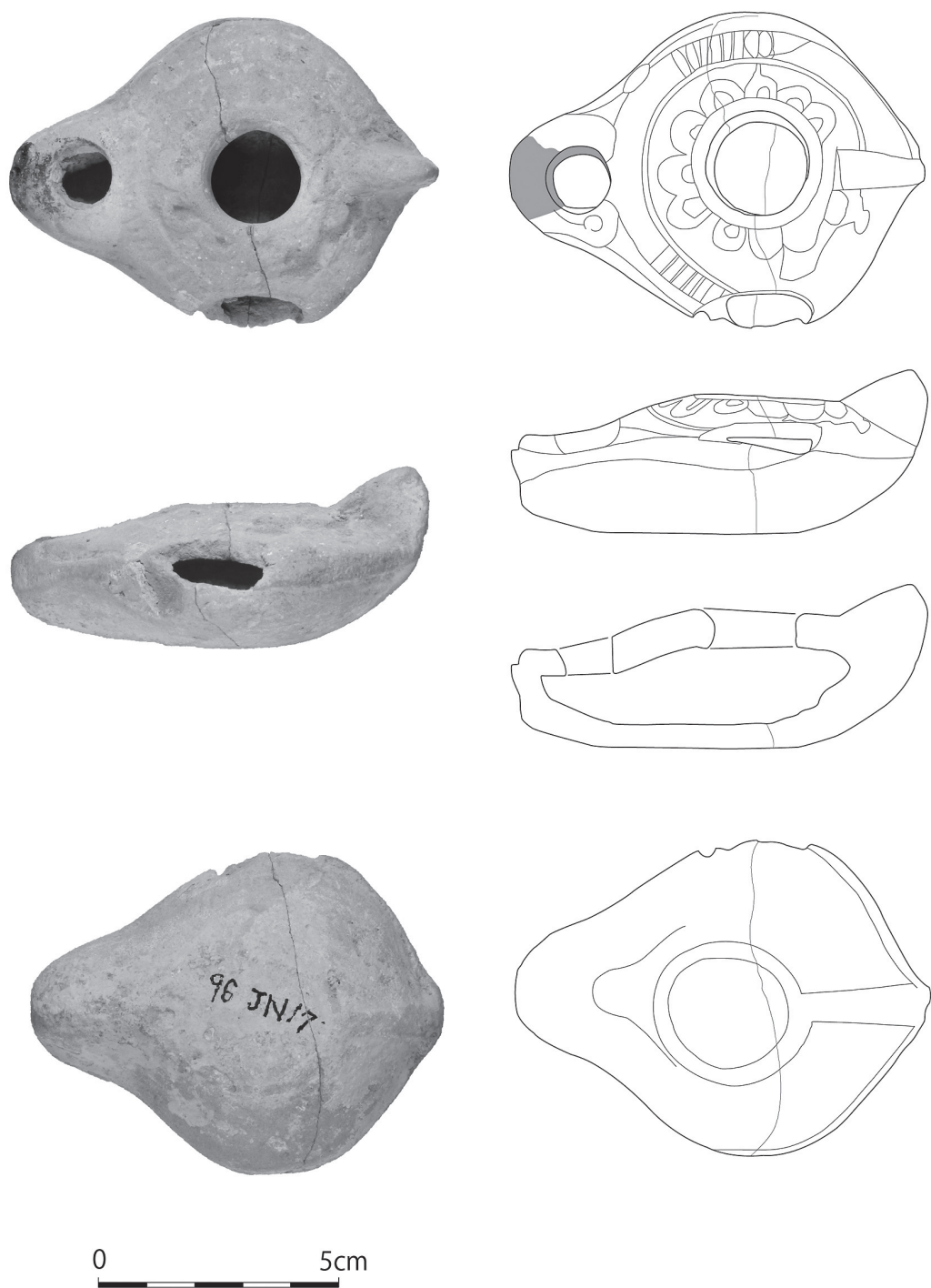


図13. 12-96JN17写真・実測図

13-96JN16 (図14)

【実 測 値】 本体(縦×幅×高さ):9.4×7.0×3.4

注油口径:2.3

灯芯口径:1.5

非常に浅い輪高台径:3.7

【所蔵年代】 1963年

【類 型】 —

【推定製作地】 —

【詳 細】 型製ランプ。ノズルは小さく本体からやや突き出た形状となっている。灯芯口には煤跡が確認できる。ディスク部分は無く、肩部に注油口が設けられる形状となっている。肩部にはヤドリギの装飾が見られる。ノズルの反対側の肩部にノブ状の把手が取り付けられており、後方にやや反り返る形となっている。底部には高台があり、この高台は円形であり、かつ円から把手を有する方面に向かって高台が伸びている形状となっている。

【スタンプの有無】 なし

【胎土の色】 Hue10YR8/3

【スリップの色】 Hue2.5YR5/8

【年 代】 —

【類 例】 把手部分は14-96JN18に類似している一方で、ディスク部分が見られず、肩部の装飾性が高い点が異なる。器形の類例が現時点で見られないが、把手やおおよその器形から金沢大学資料館所蔵の14-96JN18に類似し、これに近い年代のランプであると示唆される。

【所 見】 —

【保存状態】 全体的に磨耗しているものの、大きな破損は見られない。

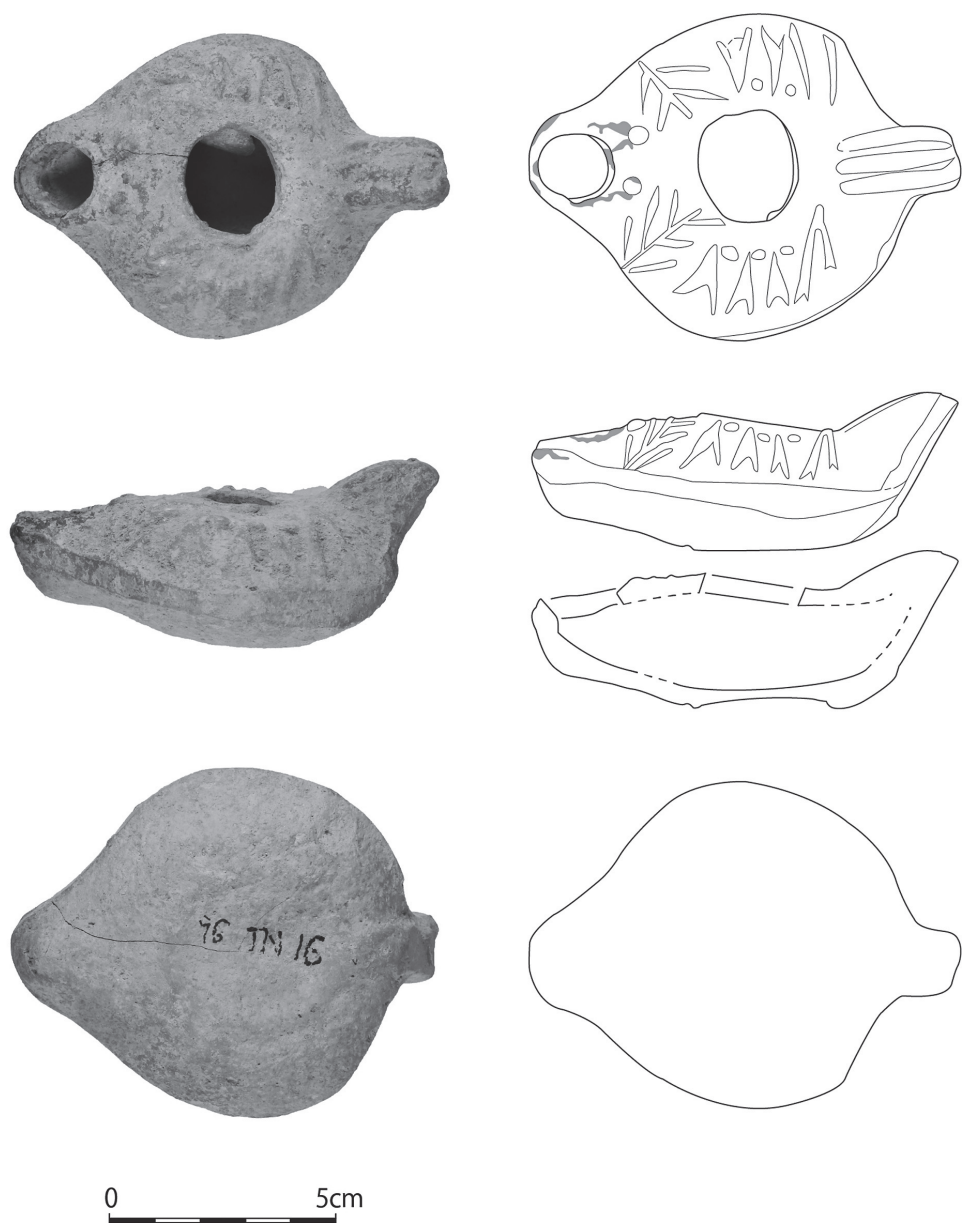


図14. 13-96JN16写真・実測図（1997年『資料館だより9』を再トレース）

14-96JN18 (図15)

【実 測 値】 本体(縦×幅×高さ):9.8×7.0×3.4 (把手部分除く本体の高さ:2.6)

注油口径:1.9

灯芯口径:1.2

底部径:3.5

【所蔵年代】 1963年

【類 型】 アダドタイプ13グループ1

【推定製作地】 パレスチナまたはヨルダン

【詳 細】 型製ランプ。ノズルは小さくやや本体から突き出た形状となっている。灯芯口に煤跡が一部見られる他、肩の側部と底部に煤跡のような痕跡が確認できる。ディスク部分は肩部よりも高く、装飾は見られない。また、肩部には丸の凹凸がある。ノズルとは反対側の肩部には後方にやや反り返る把手を有し、この把手には2本の刻線が見られる。底部は円形の高台となっている。

【スタンプの有無】 なし

【胎土の色】 Hue7.5YR8/2

【スリップの色】 Hue2.5YR6/6

【推定年代】 3～4世紀

【類 例】 ベト・シャン出土の地方胎土ランプ、後期ローマ時代タイプ3、No.3が類例として挙げられる (Hadad 1997)。このランプは、アンマン (Amman) において発見されたランプの形状から「Jebel Jofeh」型と呼ばれるランプであり、ベト・シャンにおいてアンフォラと共伴し出土している一方で、出土位置からはその年代が特定できず、「Jebel Jofeh」ランプの年代である3世紀付近であると考えられる (Hadad 1997:151)。このクムラン出土のランプはアダドによってタイプ13グループ1に再分類されており、3世紀から4世紀と年代づけられている (Hadad 2002:22)。

【所 見】 —

【保存状態】 激しく磨耗。割れ、欠けなし。

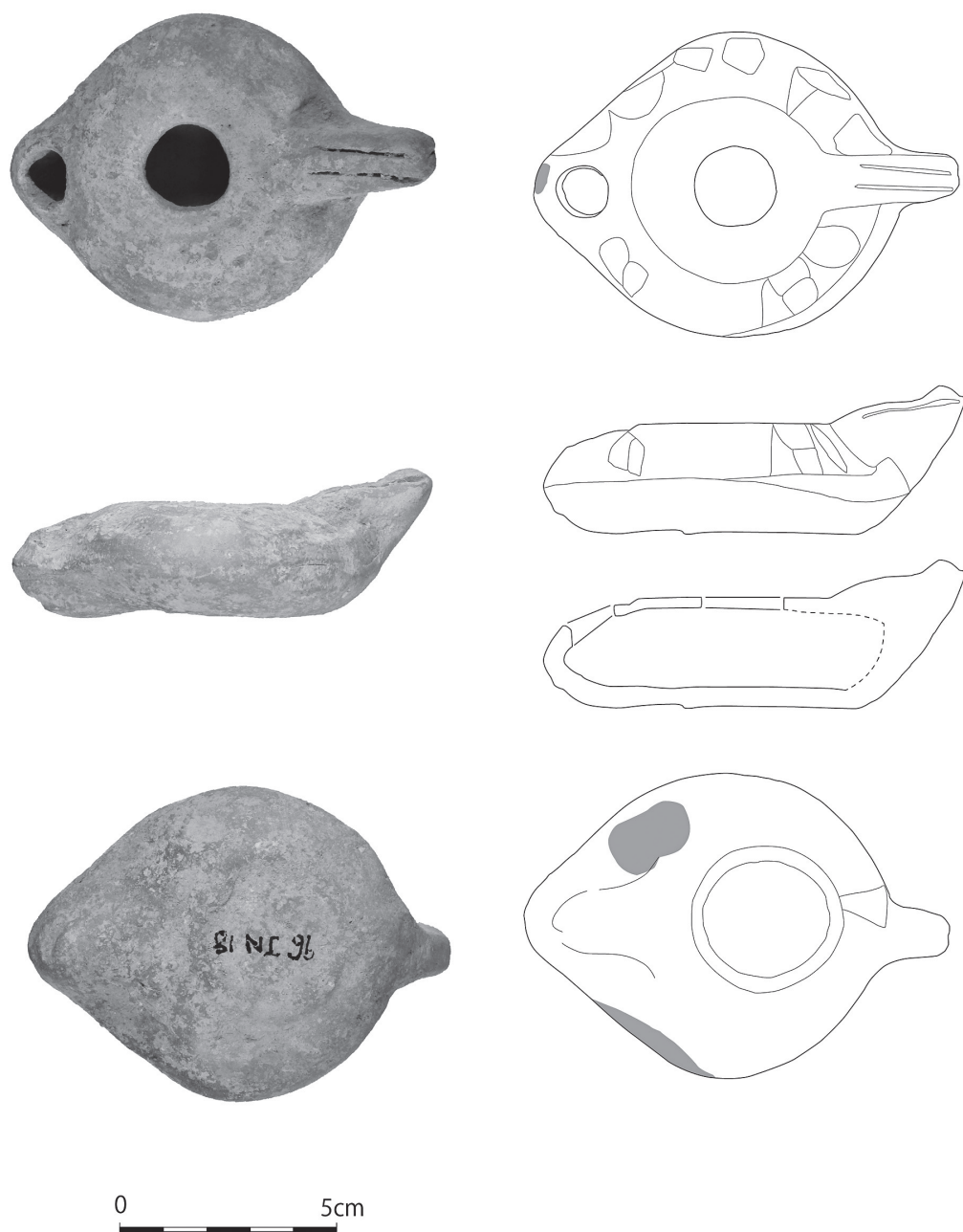


図15. 14-96JN18写真・実測図

15-96JN14 (図16)

【実 測 値】 本体（縦×幅×高さ）:7.3×5.5×2.3

注油口径:2.7

灯芯口径:1.0

複数の圈線を伴う輪高台径:3.5

【所蔵年代】 1963年

【類 型】 なし

【推定製作地】 ベト・ナッティフ

【詳 細】 型製ランプ。ノズルは本体からやや突き出た形状となっており、ノズルと本体の境界部には、二重の線で区切られている。灯芯口には煤跡が確認できる。ディスク部分は無く、肩部に注油口が設けられる形状となっている。肩部にはヤドリギの装飾が見られる。ノズルの反対側の肩部にノブ状の把手を有する。底部は4重の同心円状の円を有し、平坦で安定した形状となっている。加えて底部のノズルと対応する部分には、ノズル部分と本体部分を分離するような2重の円弧が見られる。

【スタンプの有無】 なし

【胎土の色】 Hue10YR6/1

【スリップの色】 Hue7.5YR7/6

【推定年代】 3～4世紀

【類 例】 イスラエル博物館所蔵の地方工房製ランプNo.280 (Israeli&Avida 1988:PL.L) に器形が類似する。このランプはエルサレム地域由来となるランプであり、いくつかのランプはラマットレイチェル (Ramat Rachel) の埋葬洞窟で発見されている (Israeli&Avida 1988: 101)。肩部の線はイスラエル博物館所蔵、ベト・ナッティフ生産のNo.375～380 (Israeli&Avida 1988:PL.L17) に類似し、3～4世紀とされる (Israeli&Avida 1988: 130)。

【所 見】 —

【保存状態】 把手部分付近の肩部破損。



図16. 15-96JN14写真・実測図（1997年『資料館だより9』を再トレース）

16-96JN20 (図17)

【実 測 値】 本体(縦×幅×高さ):8.3×6.1×3.1

注油口径:3.3×2.8

灯芯口径:1.5

底部径:4.0

【所蔵年代】 1963年

【類 型】 なし

【推定製作地】 エルサレム周辺

【詳 細】 型製ランプ。ノズルは本体よりもやや突き出す形状となっている。灯芯口に広く煤跡が確認できる。ディスク部分は無く、肩部に注油口が設けられる形状となっており、注油口は肩部よりもやや隆起している。肩部にはヤドリギ模様の装飾が施される他、鋸歯文あるいはダビデの星のような三角連続文様が確認できる。加えて、ノズルと反対側の肩部には円とその円を囲む目玉文様が見られる。把手は取り付けられていない。底部には、紡錘形を重ねた文様がみられる。

【スタンプの有無】 底部にモチーフが確認できる。

【胎土の色】 Hue7.5Y8/1

【スリップの色】 Hue2.5YR6/6

【推定年代】 3～7世紀

【類 例】 イスラエル博物館所蔵の3～7世紀とされる地方工房製ランプNo.296 (Israeli&Avida 1988:PL.L1) が類例として挙げられる。このランプはエルサレムとその周辺で見られる器型であり、装飾はベト・ナッティフに類似するが、より線的で装飾は少ないとされる (Israeli&Avida 1988:104)。底部の文様は、イスラエル博物館所蔵の70年から2世紀中盤に年代づけられるダロムランプNo.144 (Israeli&Avida 198:PL.25) に見られる飲料用容器のモチーフに類似している。

【所 見】 上記の飲料用容器のモチーフはアンフォラまたはゴブレットといった、ワインを保存および飲用するための容器となっている。これらは、ブドウの木を補完する装飾的な要素となり、単独でみられるか、またはブドウの房を伴って現れる傾向にある (Israeli&Avida 1988:63)。

【保存状態】 ランプ表面の磨耗は激しいが、大きな損傷は見られない。

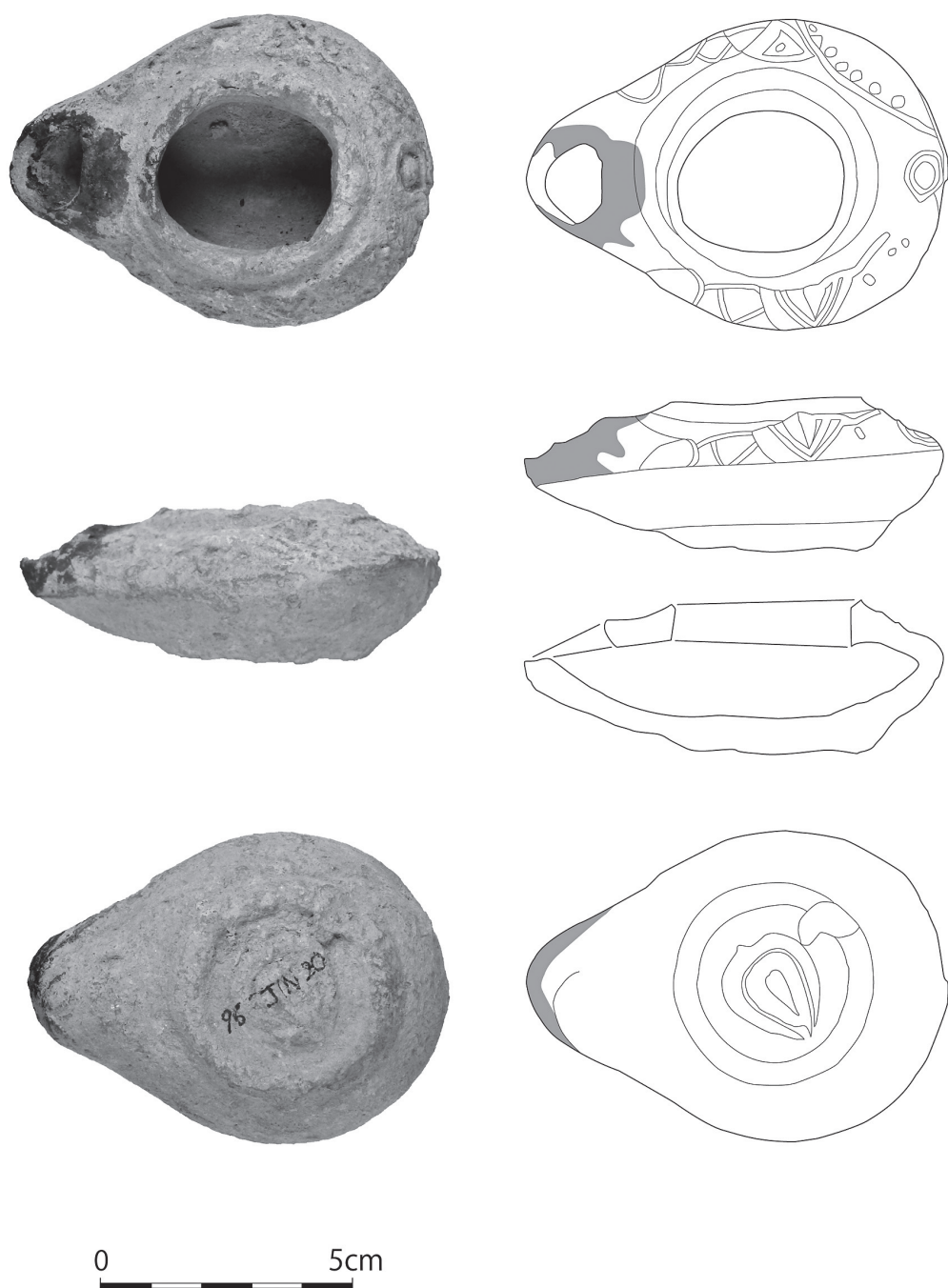


図17. 16-96JN20写真・実測図

17-96JN26 (図18)

【実 測 値】 本体 (縦×幅×高さ) :7.9×5.2×3.1

注油口径:2.4

灯芯口径:ノズル部分欠損

底部径:3.3×3.0

【所蔵年代】 1963年

【類 型】 ケネディータイプ11またはタイプ14、アダドタイプ17

【推定製作地】 ベト・ナッティフ

【詳 細】 型製ランプ。ノズルは非常に大きく、ウリのような器形となっている。灯芯口付近に煤跡が確認できる。ノズル部分には十字型の浮文が見られる。ディスク部分は非常に狭く、肩部との境界となる刻線を有する。また、肩部よりもやや隆起した形状となっており、ほぼ肩部の一部となっている。肩部には連続葉文が見られる。ノズルの反対側となる肩部には把手が見られる。底部には円形の高台があり中央部分には円の模様が見られる。

【スタンプの有無】 なし

【胎土の色】 Hue7.5YR8/2

【スリップの色】 Hue5YR6/4

【推定年代】 4世紀～5世紀

【類 例】 イェール大学所蔵のケネディータイプ11ランプNo.540 (Kennedy 1961:PL.23) とNo.580 (Kennedy 1961:PL.24) に類似し、これはベト・ナッティフランプで、3～4世紀とされる (Kennedy 1961: 78-79)。加えて、イスラエル博物館所蔵の地方工房製とされるランプNo.286 (Israeli&Avida 1988:PL.L) の他、3～4世紀のベト・ナッティフランプNo.334～336 (Israeli&Avida 1988:PL.L9)、No.351、No.356 (Israeli&Avida 1988:PL.12)、No.360 (Israeli&Avida 1988:PL.14)、No.381 (Israeli&Avida 1988:PL.18) にも類似する。また、ベト・シャン出土のアダドタイプ8に属するランプのうちNo.9のランプに類似する。このランプに類似したペラ出土のランプは、A.W.マクニコル (McNicoll) によって3～4世紀とされ、ガダラ (Gadara) 出土の類似ランプは3世紀後半から5世紀と年代付けられている (Hadad 1997:154-155)。ベト・シャン出土のアダドタイプ8は、ケネディータイプ14に類似し、4世紀から5世紀と年代付けられる (Hadad 1997:155-156)。このランプはアダドによって、アダドタイプ17に再分類されており、4世紀から5世紀とされる (Hadad 2002:26-35)。

【所 見】 器形はベト・ナッティフのランプに類似する一方で、アダドの類例に見られるように、ベト・ナッティフランプの模倣ランプである可能性についても検討する必要がある。

【保存状態】 ノズル部分が欠損。注油口から肩部にかけていくつかひびが見られる。

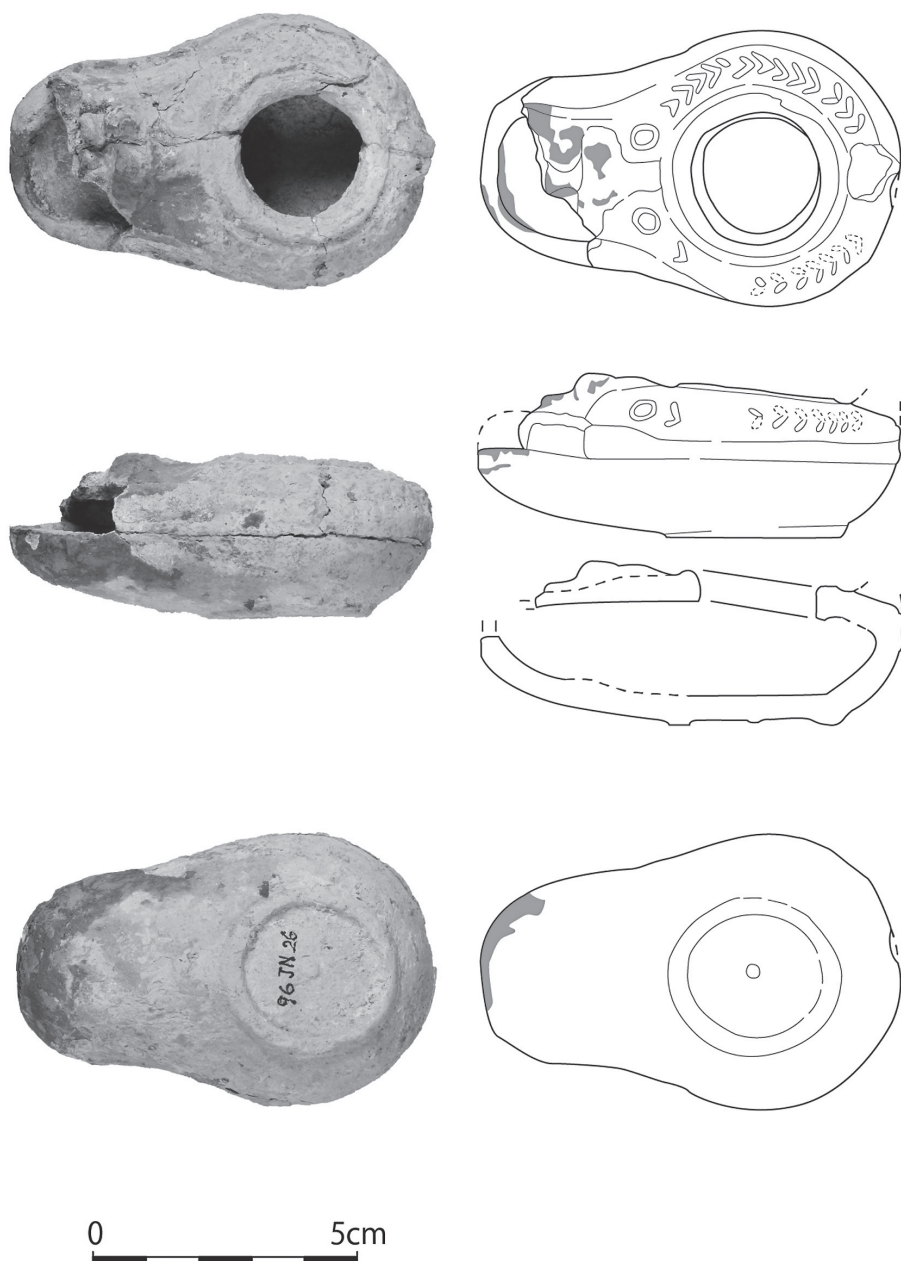


図18. 17-96JN26写真・実測図（1997年『資料館だより9』を再トレース）

6. 金沢大学資料館所蔵ランプの位置づけ

6.1. 年代による整理

金沢大学資料館所蔵のローマ時代併行期とされるランプについて、類例となるランプを参照し(図19)、推定される年代ごとに大きく5つのグループに分けた。これらのグループはそれぞれ時代の古いものからグループA～Eとする(図20)。また、その他に分類されるものはグループFとする。

グループA：このグループに属するランプの推定年代は紀元前1世紀から紀元後1世紀で、ランプ1-96JN27の1点が該当する。

グループB：1世紀後半以降と推定されるランプで、2世紀まで見られる5-96JN4と、3世紀まで見られる2-96JN8が該当する。

グループC：2世紀以降と推定されるランプで、3世紀まで見られる3-96JN3と8-96JN5、3世紀後半まで見られる4-96JN6が該当する。ただし、8-96JN5は2世紀後半以降に見られるランプとなっている。

グループD：3世紀から4世紀に見られるランプで、9-96JN7、11-96JN19、12-96JN17、14-96JN18、15-96JN14の5点が該当する。

グループE：4世紀から5世紀に見られるランプで、6-96JN11、7-96JN12、17-96JN26の3点がこれに該当する。

グループF：推定年代が3世紀から7世紀と年代幅が比較的広い16-96JN20と10-96JN15、類例が見られず、恐らくローマ時代併行期と推定される13-96JN16の3点が該当する。

6.2. 生産地と用途

金沢大学資料館所蔵のローマ時代併行期ランプは、伝ベツレヘム出土とされているが、その出土地域や生産地は不明である。よって、本資料の生産地や用途については、類例となるランプの生産地及び出土地を参照することで考察する。

6.2.1. 生産地

ランプの生産地に着目すると(図19)、パレスチナで生産されたと考えられるランプが11点見られる。パレスチナ以外で生産されたと推測されるランプは、2-96JN8、3-96JN3、4-96JN6、8-96JN5の4点で、これらのランプはローマの地方部分で生産されたと考えられる。また、ローマの属州地域での生産と考えられる3-96JN3は特にトルコ・シリアで見られる器形である他、4-96JN6は特にヨルダンのジェラシュまたはキプロスで見られる器形であるように、パレスチナ周辺地域で見られるランプであると言える。ランプ5-96JN4は、ローマから輸入されたランプであろうと考えられる。このようにパレスチナ生産のランプが多数見られる他、その他のランプについてもパレスチナ周辺地域からの輸入ランプであるという点から、金沢大学資料館所蔵ランプは少なくともパレスチナ周辺から出土したランプであり、またベツレヘム出土であるという点に矛盾はみられない。

6.2.2. 用途

ランプは一般家庭や公共施設、礼拝所といった場所で照明器具として使用された他、祭壇の供物容器や、副葬品としても使用された(Sussman 1983:1-3)。ランプを副葬品として埋納する際には

金沢大学資料館所蔵伝ベツレヘム出土のローマンランプにおける年代と類型の一考察

資料番号	図番号	本体 (cm)	注油口	灯窓口 (cm)	底径 (cm)	所蔵年代	類型	およその生産地	スタンプの有無	胎土の色	スリップの色	推定年代	事例	使用痕
1-96IN27	1	(8.1) × 5.8 × 3.1	2.2	—	3.1 × 2.6	1963年	ケネディータイプ2 ムイナルチタイプ7044 サスマンタイプH36、H40	エルサレム	—	Hue7.5YR7/6	Hue2.5Y7/2	紀元前1世紀～1世紀	Kennedy 1961:PL20 No.484 Kennedy 1980:PL8 No.65～66 Israel&Avida 1988:PL2 No.17～18 Sussman 2009:195 No.310 Mlynarczyk 2013: fig.5 No.KH319	○
2-96IN8	2	(7.6) × 7.1 × 2.8	0.4	—	4.3	1963年	ケネディータイプ5 ローシェクタイプ8	ローマの地方	—	Hue2.5Y7/2	Hue2.5Y8/2	1世紀後半～3世紀	Kennedy 1961:PL21 No.503 Kennedy 1961:PL22 No.504、No.509 No.504、No.509 No.21 Baily 1988:PL58 fig.91 Q2399	○
3-96IN3	3	(7.3) × 6.6 × 2.7	0.7	—	丸底	1963年	ケネディータイプ5 ローシェクタイプ8	ローマの地方 特にトルコ・シリア	—	Hue10YR8/3	Hue10YR8/2	2～3世紀	Kennedy 1961:PL21 No.499～503 Kennedy 1961:PL21 No.504～509 Israel&Avida 1988:PL2 No.40～44 Hayes 1980:PL42 No.386 Baily 1988:PL72 Q2631～2633 Baily 1988:PL91 Q2880	—
4-96IN6	4	10.1 × 7.7 × 2.5	0.7	1.3 × 1.1	約4.1	1963年	ケネディータイプ5	ローマの地方 特にヨルダンのジェラシユまたはキ プロス	—	Hue2.5Y8/2	Hue2.5Y8/1	2～3世紀後半	Kennedy 1962:PL21 No.499～503 Kennedy 1962:PL22 No.504～509 Israel&Avida 1988:PL6 No.38 Hayes 1980:PL40 No.333	○
5-96IN4	5	7.7 × 7.4 × 3.0	—	0.9	3.6	1963年	アダドタイプ7変異型1-A	ローマ輸入ランプ	—	Hue2.5Y6/2	Hue2.5Y8/2	1世紀後半～2世紀	Israel&Avida 1988:PL2 No.17 Lermolin 2010:PL1 No.1～2	○
6-96IN11	6	7.6 × 6.4 × 2.6	—	1.4	3.3	1963年	アダドタイプ15	エルサレム	○	Hue7.5YR7/6	Hue7.5YR8/1	4～5世紀	Hadad 2002:25 No.49	○
7-96IN12	7	7.9 × 6.6 × 2.8	—	2.2 × 1.8	3.4	1963年	アダドタイプ15	エルサレム	—	Hue2.5YR6/3	Hue5Y7/1	4～5世紀	Hadad 2002:25 No.49	○
8-96IN5	8	7.9 × 6.8 × 2.9	—	0.9 × 1.4	3.4	1963年	アダドタイプ17変異型1-B	ローマの地方	—	Hue7.5YR7/3	Hue7.5YR8/3	2世紀後半～3世紀	Lermolin 2010:PL9 No.45～48	○
9-96IN7	9	7.9 × 6.5 × 3.3	2.0	1.2	4.1	1963年	アダドタイプ13グループ2	パレスチナ またはヨルダン	—	Hue2.5Y6/1	Hue2.5YR5/8	3～4世紀	Israel&Avida 1988:PLX17 No.270～272 Hadad 1997: 184, 2002:21	○
10-96IN15	10	9.0 × 6.9 × 3.5	2.1	1.3	4.6	1963年	サスマンタイプH41A	エルサレム	—	Hue10YR8/2	Hue5Y8/1	3～7世紀	Israel&Avida 1988: PL11 No.289	—
11-96IN19	11	(8.2) × 6.7 × 2.7	1.0	1.9	丸底	1963年		エルサレム周辺	—	Hue7.5YR7/4	Hue10YR8/2	3～7世紀	Sussman 2009:156,198 No.345	○
12-96IN17	12	8.6 × 6.5 × 3.4	1.9	1.2	3.2 × 3.0	1963年	アダドタイプ13グループ1	エルサレム周辺	—	Hue7.5YR7/3	Hue10YR8/2	3～4世紀	Israel&Avida 1988: PL11 No.292	○
13-96IN16	13	9.4 × 7.0 × 3.4	2.3	1.5	3.7	1963年		—	—	Hue10YR8/3	Hue2.5YR5/8	—	Hadad 2002:22 No.38	○
14-96IN18	14	9.8 × 7.0 × 3.4	1.9	1.2	3.5	1963年	アダドタイプ13グループ1	パレスチナ またはヨルダン	—	Hue7.5YR8/2	Hue2.5YR6/6	3～4世紀	Hadad 1997: No.3	○
15-96IN14	15	7.3 × 5.5 × 2.3	2.7	1.0	3.5	1963年		ベト・ナッティフ	—	Hue10YR6/1	Hue7.5YR7/6	3～4世紀	Israel&Avida 1988:PL11 No.296	○
16-96IN20	16	8.3 × 6.1 × 3.1	3.3 × 2.8	1.5	4.0	1963年		エルサレム周辺	○	Hue7.5Y8/1	Hue2.5YR6/6	3～7世紀	Israel&Avida 1988:PL25 No.144	○
													Kennedy 1961:PL23 No.540	
17-96IN26	17	7.9 × 5.2 × 3.1	2.4	—	3.3 × 3.0	1963年	ケネディータイプ11 またはタイプ14	ベト・ナッティフ	—	Hue7.5YR8/2	Hue5YR6/4	4世紀～5世紀	Israel&Avida 1988:PL11 No.286 Israel&Avida 1988:PL19 No.334～336 Israel&Avida 1988:PL12 No.351、No.356 Israel&Avida 1988:PL14 No.360 Israel&Avida 1988:PL18 No.381 Hadad 1997:154-155 No.9	○

図19. 金沢大学資料館所蔵ローマ時代併行期ランプ一覧

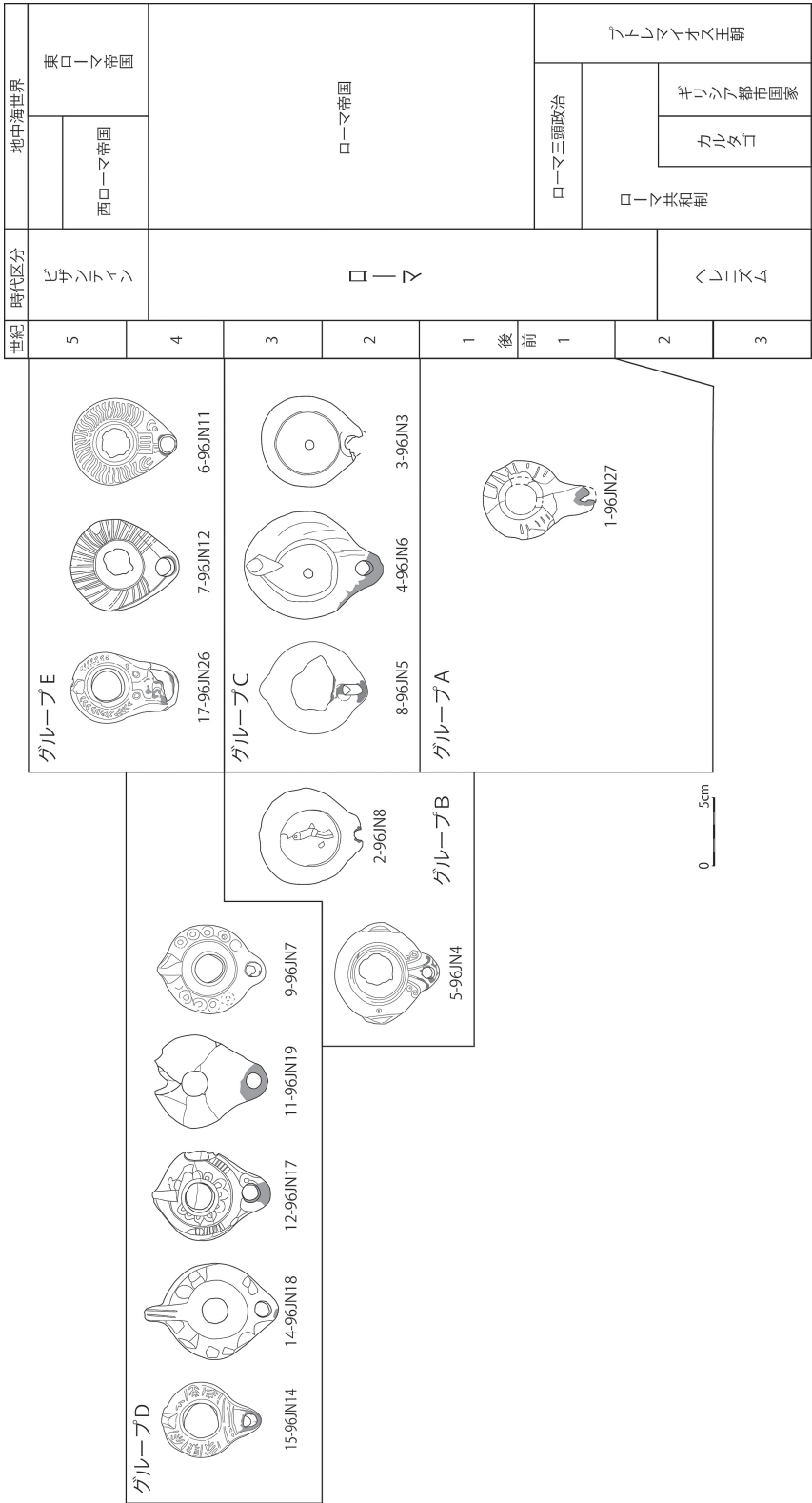


図20. 金沢大学資料館所蔵ローマ時代併行期ランプの変遷と年表

一般的に未使用のランプが埋納される傾向にあるが、パレスチナなどの埋葬窟遺構では、葬儀の儀式としてこれらのランプが使用される慣習が見られる (Sussman 1983:3)。加えて、ユダヤの埋葬習慣において、ランプは中心的な役割を担っており、墓の内部を照らし故人を尊重するとともに、悪霊に対抗する手段としてランプが使用された例も挙げられる (Sussman 1983:4)。よって、埋葬のコンテキストで発見されるランプは未使用であるものと使用痕が見られるランプの双方がある点に留意する必要がある。加えて、未使用のランプは副葬品である可能性は高いものの、工房で生産されたまま未使用である可能性もあり、必ずしも埋葬のコンテキストで使用されたとは断言できない。以上を考慮しつつ、本項では使用痕を観察するとともに、それぞれのランプの類例の出土コンテキストからランプの用途について考察を進める。ランプが実際に使用されたか否かは、ランプの灯芯口部付近の煤跡を観察することで検討する。

金沢大学資料館所蔵のローマ時代併行期ランプのうち、15点に煤跡が確認でき、少なくとも1回以上は使用されたことがわかる。使用痕が見られる点から、これらのランプの用途は照明器具としての役割または埋葬の際の祭祀的な役割を担っていたと考えられる。対して煤跡が確認できない3-96JN3と10-96JN15は、埋葬時の副葬品として使用されたか、もしくは工房で製作されたランプが未使用のまま出土した可能性が指摘できる。

使用痕の有無の確認からは、用途についての推測の幅が広い。そこで次に、年代グループごとに類例の出土コンテキストが分るものをまとめ、より詳細にその用途について検討する。出土コンテキストが分る類例が見られるランプは、1-96JN27、5-96JN4、8-96JN5、9-96JN7、12-96JN17、14-96JN18、15-96JN14、6-96JN11、17-96JN26の9点であり、全て煤跡の使用痕が見られるランプとなっている。

年代グループAに分類される1-96JN27はクムランのアイنفェシュカ洞窟出土のランプ (Młynarczyk 2013:100,119-120) の類例が見られる他、5-96JN4はヒッポス遺構の複合浴場遺構から出土しているランプ (Alexander 2010:119-120) の例が見られる。年代グループCに分類される8-96JN5も同じくヒッポス遺跡の複合浴場遺構から出土しているランプの例が見られる。年代グループDに分類される9-96JN7と12-96JN17はベト・シャン遺跡における大聖堂南門の反対側に位置する複合施設にて出土しているランプ (Hadad 1997:152) の例がある他、14-96JN18の類例はベト・シャン遺跡の円形劇場付近で出土している (Hadad 1997:151)。加えて、15-96JN14の類例はパレスチナのラマットレイチェルの埋葬洞窟で発見されている (Israeli&Avida 1988:101)。年代グループEに分類される6-96JN11は円形劇場と隣接する通り付近で出土しているランプ (Hadad 2002:24) の類例がある他、17-96JN26はヨルダン渓谷出土ランプ (Kennedy 1961:102) やベト・ナッティフ遺跡出土のランプ (Israeli&Avida 1988:119)、ベト・シャン遺跡の円形劇場東門より出土したランプ (Hadad 1997:156) に類例が見られる。

それぞれのランプの煤跡の有無と類例のコンテキストから、年代ごとに異なる傾向は見られない。類例となるランプは公共施設からの出土例が多く見られる他、少数ではあるが埋葬洞窟から出土している。使用される公共施設としては、複合浴場や大聖堂に隣接する複合施設、円形劇場付近が挙げられる。以上を受けて、金沢大学資料館所蔵のローマ時代併行期のランプの用途は、照明器具として公共施設で利用されたか、埋葬洞窟における埋葬の儀式で利用された可能性が高い。これらのランプがいずれの用途であったかは、煤跡から使用頻度などを分析することで明らかにすることができると考えるが、破壊分析となる可能性が高く現実的には困難であろう。また、煤跡が確認できないランプについては、出土場所が明らかとなっている類例が現時点では見当たらず、その用

途について言及することは困難である。

6.3. ディスクの図像と破壊

6.3.1. ディスクの図像

一般的にディスクが広く注油口が小さいランプは装飾的なランプとなっており、このようなランプは特にローマ生産に多く見られる。金沢大学資料館所蔵のローマ時代併行期のランプのうち、注油口が小さくディスク部分が広いローマ特有の特徴を有するランプは、2-96JN8と3-96JN3、4-96JN6の3点となっている。これらのランプのうち、3-96JN3は明らかにディスク部分に図像が確認できず、ランプが製作された時点で、すでに図像は描かれていなかったと見られる。一方で、2-96JN8は摩耗が激しいものの、ディスク部分に凹凸が見られる。加えて4-96JN6についてもディスク部分に明らかに他の部分とは異なる白色のスリップが見られることから、かつては図像があった可能性も考えられる。ディスク図像を消す行為については、次項で述べる。

本項では、特にディスク部分に確実に図像が確認できる2-96JN8に注目する。この図像について、1997年発行の『金沢資料館だより9』では、動物の浮紋と観察されている（佐々木他 1997a）が、摩耗または、繰り返し複製された型の摩耗により、ディスク部分の図像は目視で明瞭に判別することは困難である。よって本項では作成した3Dモデルから表面の凹凸を観察し、他の類例と合わせて詳細に検討を行う。

作成した3Dモデル（図21）を参照すると、ディスク中央部分に縦に湾曲した線が見られ、腰をかめた人物像が確認できる。加えて、湾曲線の延長上の上部の肩部付近には人物の頭部と見られる凹凸が確認できる他、湾曲した胴体部分からディスクの左に向かって手が延びており、棒のようなものを手に取っている様子がうかがえる。このような図像について、イスラエル博物館所蔵のランプに類例が見られるように、確かに釣り人の図像であると言える。イスラエル博物館所蔵の釣り人の図像を有するランプは、縦8.6cm、高さ2.2cmで、通常のローマンランプよりもややディスク部分が小さく、非常に平坦で、小さく短いノズルを有する特徴となっている（図22、Israeli&Avida 1988:PL3, No.21）。また、ケネディータイプ5とされるイエール大学パレスチナ陶器ホワイティング・コレクションの縦8cm、幅6.5cm、高さ2.5cmのランプにおいても同様の図像が確認できる（図23、Kennedy 1961 No.503）。上記2点の類例は底部に同様の同心円状の模様が見られる点でも、2-96JN8と類似している。この2点のランプからは、共に肩部の灯芯口付近の渦巻文様や、肩上部の両刃斧の文様が見られる。2-96JN8においてこのような肩部の装飾は明瞭に確認できないが、3Dモデルから渦巻文様及び両刃斧の装飾と同様の形状の凹凸がある点がうかがえる。よって、ランプ2-96JN8について、かつては釣り人の装飾があり、類例に上げた2点と同様の型が使用されていた可能性は十分に考えられる。

このような釣り人の図像は、出土位置が明らかではないイスラエル博物館所蔵ランプやイエール大学所蔵ランプのみならず、出土コンテキストが明らかな類例がパルミラ（Palmyra）出土のランプにも見られる。パルミラ遺跡東南墓地の地下墓Fにおいて同様の型から作成されたと思われる3点の類例が見られ（Higuchi&Saito 2001:FIG.83,L78-80）、いずれも煤跡が確認できる。ランプの図像については、左半身を向けた人物の胴体の図像であるとされている（Higuchi&Saito 2001:131）。これらのランプはT墓東側の玄室や埋葬された人骨と供に出土しており（Higuchi&Saito 2001:66-68）、年代は3世紀とされる（Higuchi&Saito 2001:120）。これらのランプは人物像に加え、人物の前に釣り竿のような棒が見られる他、肩部には両刃斧の図像が2点

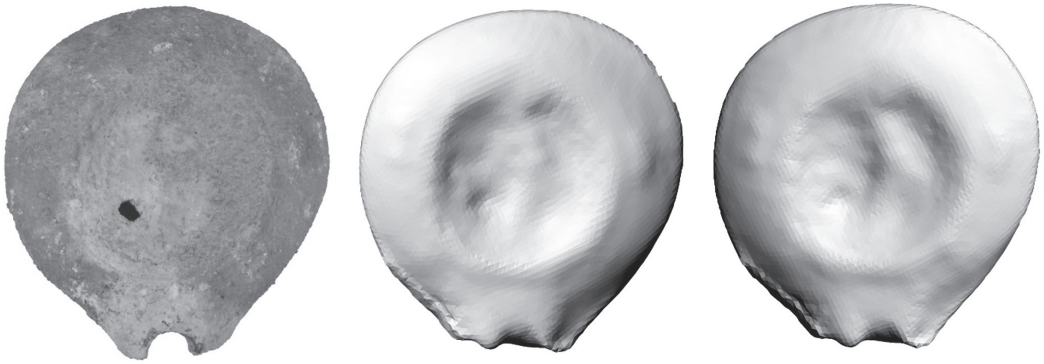


図21. 2-96JN8 (左) と作成した3Dモデル (中央:光源左上、右:光源右上)



図22. Israeli&Avida 1988: PL.3, No.21



図23. Kennedy 1961:Type5 No.503

と、灯芯口付近の肩部には渦卷文が見られ、金沢大学資料館所蔵ランプである2-96JN8と上記に挙げたイエール大学所蔵の類例ランプ及びイスラエル博物館所蔵の類例ランプと同様の構図であるといえる。加えてパルミラの地下墓T出土のランプのうち、特にT墓東側の玄室出土のランプL78は、明るいオレンジ色の胎土である点からも2-96JN8との類似点が見てとれる。以上の点から、金沢大学資料館所蔵ランプ2-96JN8は3世紀にシリア・パレスチナ地域で広く見られ、しばしばそのランプ型が複製されたランプである可能性が高い。

釣り人の図像は、ローマのアフリカ属州ランプにおいても例が見られる。約175年から250年と年代付けられる大英博物館所蔵のランプQ 1715 (Baily 1988:PL15,fig57) には、カルタゴ港において釣り竿を持ち、魚籠を設置したボートに乗りこんだ着帽の人物と、同じく着帽し網を持った人物の漁労の様子が描かれている。この図像は、肉屋が豚を屠殺する様子が描かれるようなランプと同様、ローマ時代の仕事の様子を描写するランプの一種となっている。このような釣りをする図像についてより時代の古い例として、フラウィウス朝からトラヤヌス帝統治時代 (69～117年) に

年代付けられるエフェソスランプ (Baily 1988: P L .101, fig.17, Q 3044) が挙げられる。このランプの図像は、左手に魚籠を持ち、右手の釣り竿で魚を釣るエロスを描写している。このようなエロスが釣りをする様子の構図が後にローマでの生活の様子として描かれるようになり、パレスチナ付近で見られるランプにおいて、生活の様子を描く釣り人の図像として定着した可能性がある。または、このように日常生活の図像のように見せる一方で、ギリシア神話におけるエロスやキリスト教での「魚を釣る⁶」といった文化的背景に基づく意味を内包している可能性も否めない。ただし上記に類例として挙げた2点のランプは2-96JN8と異なる器形であり、両刃斧装飾が見られない点で異なる点に留意する必要がある。

6.3.2. ディスクの破壊

金沢大学資料館所蔵のローマ時代併行期のランプのうち、ディスク部分の図像等をスリップで消した可能性のある4-96JN6に加えて、ディスク部分が破損しているものの、かつてはローマ特有の特徴を有していたと考えられるランプとして、5-96JN4と6-96JN11、7-96JN12の3点が確認できる。ディスク部分が破壊されているランプは、それぞれのランプ本体が無傷であり、ディスク部分が慎重に壊されていることから、意図的な破壊であり、ランプがこのような使用されていたことがわかる。このような慣行はイスラエリとアビダによると、パレスチナにおいて大きな注油口が好まれたか、もしくはこれらのランプの使用者が、ヘリオスの図像など異教の装飾デザインを抹消する意図があった可能性があるとしている (Israeli&Avida 1988: 33)。また、ヒッポスにおける複合浴場遺構にて一括で出土した1世紀後半から2世紀のアダドタイプ7変異型1-Aの殆どのランプはディスクが破壊された状態で発見されている。レルモリンはこのような慣行はオリーブオイルの代替えとして使用された動物油を注油口へと注ぐ際に便利であったためであるとしている (Lermolin 2010: 119-120)。

金沢大学資料館所蔵ランプ6-96JN11と7-96JN12は4世紀から5世紀にエルサレムで生産されたランプである可能性が高い。またローマのディスク部分に図像を有するランプと比較するとディスク部分が小さいため、ディスク部分に図像があった可能性は低い。よって、この2点のランプのディスク部分の破壊行為は異教の装飾デザインを抹消する意図はなく、レルモリンが指摘するように、注油の利便性を上げるためであったと考える。一方で5-96JN4は、1世紀後半から2世紀のランプでありローマから輸入されたランプであると見られ、ディスク部分に図像が見られた可能性がある。ディスク部分に図像が見られる1世紀後半から3世紀のランプである2-96JN8は、前項で述べたように描かれた図像には宗教的な意味が含まれず、同様の図像を有するランプはパレスチナにおいてディスク部分が破壊されずに発見される例が見られる。宗教的な意味が含まれない2-96JN8のディスクは破壊されず受け入れられた一方で、5-96JN4のディスク部分には異教の装飾デザインがあったために破壊された可能性が示唆できる。2世紀から3世紀後半にローマの地方で生産されたと見られるランプ4-96JN6についても同様の可能性が示唆できる。すなわち、明らかに意図的にディスク部分をスリップで覆い、肩部を削った痕跡は、何かしらの図像等を抹消した可能性を示していると考ええる。

7. おわりに

本稿では、金沢大学資料館所蔵のローマ時代併行期に年代づけられるランプを再整理するとともに、近年の発掘調査の出土例や分類を参考に対象資料の詳細な年代の検討とランプの位置づけについて再考した。これまでの先行研究でローマ時代併行期またはローマからビザンティン時代と年代付けられていたランプに関して、詳細な年代を特定することで、対象資料がローマ時代併行期のランプであることを確認した。また、いずれの年代のランプもおおよそがパレスチナ生産のものであり、ベツレヘム出土であることは十分考えられる。

1997年の『金沢大学資料館だより9』において動物の浮文がディスク部分に見られるとされたランプ2-96JN8について、対象となるランプの観察や3Dモデル分析、イェール大学所蔵ランプやイスラエル博物館所蔵のランプの類例から、釣り人の図像である可能性が高いことが明らかとなった。このランプの類例について、出土位置が明確なパルミラの地下墓F出土のランプも同様の図像を有しており、以上に挙げた類例は全て3世紀のランプである。よって、ランプ2-96JN8は少なくともシリア・パレスチナ周辺で3世紀に広く見られるランプの型であったとみなすことができる。この釣り人の図像は69～117年と年代付けられるエフェソスランプに見られるように、少なくともエロスが釣りをする図像までたどることが可能であると考ええる。パレスチナにおいては、2-96JN8の図像はこのような宗教的コンテキストから切り離され、日常生活の様子を描く描写であったために、ディスク部分が破壊されなかったと考えられる。一方で、金沢大学資料館所蔵ランプの中には、ディスク部分が破壊されている例が数点見られる。このような破壊の背景には、推測される年代や生産地から、注油の利便性を上げる目的と考えられるランプと、宗教的な図像を抹消する目的であると考えられるランプの双方が確認できた。

謝辞

本稿は、金沢大学大学院人間社会環境研究科博士前期課程の「文化遺産学実習」の一貫として行った金沢大学資料館所蔵ランプの再整理に基づくものであり、指導教員の河合望教授からは、資料に向き合う機会をいただくとともに、手厚いご指導を賜りました。調査の実施及び分析にあたり、金沢大学資料館館長の奥野正幸教授には資料整理の機会を与えていただき、金沢大学資料館の松永篤知特任助教には資料整理のきっかけや丁寧かつ熱心なご指導を賜りました。また、国内では入手が困難である参考図書について、中近東文化センターの皆様や金沢大学考古学研究室の足立拓朗教授、金沢大学名誉教授の佐々木達夫先生に多大なご協力を賜りました。加えて、ランプの3Dモデル作成にあたって、北陸学院大学の小林正史教授、金沢大学の久保田慎二特任助教が所有される3Dスキャナー（Artec Eva 3Dスキャナー）とソフトウェア（Artec Studio及び文化財ビューワー）を借用させていただきました。3Dモデルを使用した分析から金沢大学資料館所蔵ランプにおける新たな知見に繋がりました。最後に貴重なコメントを下された査読者の先生方に御礼申し上げます。ご協力いただいた全ての皆様に心より感謝申し上げます。

註

- 1 本稿においてランプの「型」について言及する際、「型式 (Type)」の「型」を示す。また、「成形型 (mold)」の型とは「型製」と示すことで区別する。
- 2 金沢大学資料館HP「西村コレクション」〈<http://muse.w3.kanazawa-u.ac.jp/nishimura/>〉

nishimura_frame.html〉(最終アクセス:2021年2月1日)

- 3 ヘロデランプはエルサレムの洞窟において、ヘロデの治世(紀元前37～4年)以降から紀元前1世紀後半～紀元後2世紀半ばまで使用され続けたヘレニズムに伝統的な大きな注油口を有するろくろ製ランプ(Sussman 1983:14)。
- 4 ダロムランプは西暦70年に第二神殿が破壊された後、ユダヤ人が各地に分散した後から製造されはじめ、ローマンランプと同時代に使用されていたランプ(Israeli&Avida 1988:48)。
- 5 イスラエリとアビダの著作において、しばしば地域名称として「イスラエル」と表現されるが、本稿ではローマ時代併行期の資料を取り扱う観点から、これらの名称について「パレスチナ」と表記する。
- 6 キリスト教の聖書において魚に関する記述が多々見られる。特に神殿税を請求されたペテロに対しキリストが釣りをして銀貨を得よと指摘した記載(マタイ 17章24-27節)は魚を釣るという行為に一致する。

参考文献

- 佐々木達夫・在田則子・波頭桂、1997a「金沢大学資料館所蔵考古学資料紹介(3) 伝ベツレヘム出土ランプ:1」『金沢大学資料館だより9』pp.8-11、金沢大学資料館。
- 佐々木達夫・在田則子・波頭桂、1997b「金沢大学資料館所蔵考古学資料紹介(4) 伝ベツレヘムランプ:2」『金沢大学資料館だより10』pp.2-6、金沢大学資料館。
- Bailey, D.M. 1988 *A Catalogue of the Lamps in British Museum*, London: British Museum Press.
- Hadad, S. 1997 'Oil Lamps from the Third to the Eight Century C.E. at Scythopolis-Bet Shean' *Dumbarton Oaks Papers*, Vol.51, pp.147-188, Dumbarton Oaks: Trustees for Harvard University.
- Hadad, S. 2002 *Qedem Reports 4*, "The Oil Lamps from the Hebrew University Excavation at Bet Shean", Jerusalem.
- Hayes, J.W. 1980 *Ancient Lamps in the Royal Ontario Museum*. Toronto: Royal Ontario Museum.
- Higuchi, &Saito, eds. 2001 *Tomb F -Tomb of BWLH and BWRP- Southeast Necropolis Palmyra, Syria. Publication of Research for Silk Roadology Vol.2*.Nara, Japan: Research Centre for Silk Roadology.
- Israeli, Y. & Avida, U. 1988 *Oil-Lamps from Erets Israel: The Louis and Carmen Warschau Collection at the Israel Museum*, Jerusalem.
- Kennedy, Ch. A. 1963 *The Development of the Lamp in Palestine*. Berytus 14:67-115.
- Iermolin, A. 2010 'ROMAN OIL LAMPS CATALOGUE' HIPPOS SUSSITA ELEVENTH SEASON OF EXCAVATIONS', Zinman Institute of Archaeology, University of Haifa, Haifa, pp.119-152.
- Loeschcke, S. 1919 *Lampen aus Vindonissa*, Zürich xl, pp.253-269.
- Młynarczyk, J. 2013 'TERRACOTTA OIL LAMPS FROM QUMRAN: THE TYPOLOGY' RB, pp.99-133.
- Smith, R. H. 1966 'The Household Lamps of Palestine in New Testament Times' *The Biblical Archaeologist*, Feb, Vol. 29, No. 1, pp. 1-27 The University of Chicago Press on behalf of the American School of Oriental Research.

- Sussman, V. 1983 *Ornamented Jewish Oil-Lamps: from the destructions of the second temple through the Bar-Kokhba Revolt*. Warminster: Aris & Phillips Ltd.
- Sussman, V. 1987 'Samaritan Lamps of Third-Forth Centuries A.D.' *Israel Exploration Journal*, Vol.28, No.4, pp.238-250, Israel Exploration Society.
- Sussman, V. 2009 *Greek and Hellenistic Wheel-and Mould -Made Closed Oil Lamps in the Holy Land Collection of the Israel Antiquities Authority*, BAR International Series 2015, Oxford.